翡翠の記憶

作 / 麦（穀物Ｐ）

目次

第一話　比翼連理……………………… 8
第二話　ドーベルの特別な週末………… 22
第三話　千直漫才……………………… 50
第四話　イベント戦線異状なし………… 64
第五話　相思相愛相談………………… 84
第六話　お姉ちゃんへのプレゼント…… 102
第七話　Trial #0：翡翠の記憶………… 118

各話紹介

各話は連続しておらず、ドーベルさんの年齢・立ち位置・交友関係などはバラバラの並行世界的な短編集です。

第一話　比翼連理

登場：マンハッタンカフェ・アグネスタキオン（モチーフ元史実関係性）

漫画家としてデビューしたドーベルが通うようになった、後輩のマンハッタンカフェがバリスタを務める喫茶店で最近出会うようになった研究者・アグネスタキオン。そこでのひととき。

第二話　ドーベルの特別な週末
登場：スペシャルウィーク（モチーフ元史実関係性）
スズカへのプレゼントを選ぶために付き合ってほしいとスペシャルウィークから頼まれたドーベルが、彼女と過ごした特別な一日。

第三話　千直漫才
登場：サイレンススズカ（同期）
ゴールドシップの策略によりいきなり漫才をやれと言われてしまったドーベルとスズカの奮闘即席ステージ。

第四話　イベント戦線異状なし

登場：アグネスデジタル（同志）

ドーベルと後輩・アグネスデジタルがタッグを組んで乗り込んだ同人イベントで、活動を秘密にしている相手が訪れてパニック！

第五話　相思相愛相談

登場：メジロマックイーン・トウカイテイオー（二次創作的関係性）

ドーベルのもとにマックイーンとトウカイテイオーがそれぞれやって来て恋愛相談をした。それぞれの恋を成就させるためにドーベルが少しだけ背中を押す。

第六話　お姉ちゃんへのプレゼント
登場　：ドーベルの妹と弟、トレーナー
語り手：トレーナー

ドーベルが所属するチームトレーナーのもとに、ドーベルの妹と弟が訪ねてきた。お姉ちゃんにプレゼントがしたいという姉弟をサポートする。

第七話　Trial #0：翡翠の記憶
語り手：ゴールドシップ（ドーベルとの年齢差はモチーフ元の通り15歳）

トゥインクル・シリーズ引退後、レース場のパーソナリティーや近所の放課後児童クラブの世話役をしていたゴールドシップは、近所の児童クラブを運営する年上のウマ娘「リンさん」と出会う。ただのウマ娘ではなさそうなリンさんの正体とは。

第一話　比翼連理

（With アグネスタキオン ＆ マンハッタンカフェ）

トレセン学園卒業後、漫画家デビューしてから三年目に入った。練りに練って作り上げたストーリー、そして切ったネームがあまり手直しせずに採用されて短期連載が持てているのはとても幸運だった。

アタシは天才的発想力とは無縁だから、話のネタを毎日最低一つはノートに書き留め、温めることにしている。昨年末の大規模同人イベント明けはちょっとスランプに陥ったけど、街を歩いていたら回復した。その時に見つけたお店に週一回通っていて、今日がその

日だった。

「こんにちは」

「いらっしゃいませ。どうぞお好みの席へ」

喫茶『ゆきのした』。バリスタを務めているのはトレセン学園にいたマンハッタンカフェさん。アタシより四歳ほど年下の後輩だった。もともとコーヒーを淹れる腕前が一流で、学園のファン感謝祭の日に喫茶スペースを開いた時には大行列ができるほどだった。その彼女が縁あってこのお店で働いている。

アタシが通うようになって間もない頃はマスターと一緒にコーヒーを淹れている光景を見ていたけど、最近はカフェさんが一人で切り盛りしていることが多い。歴史あるお店を任されるほどの腕があるって凄いと思う。

「いつもありがとうございます。ご注文はお決まりでしょうか」

「いつものオリジナルブレンドをお願いします」

「かしこまりました。少々お時間を頂きます……」

静寂のひととき。ただ、月に一回はまもなく騒がしくなる。それもまた今日だった。

果たして、その来訪者は予想通りに現れた。

「おや、これはこれは奇遇だねェドーベルさん。大変素晴らしい！　私はオカルトというものは信じない。しかしこうやって出会える偶然には何らかの自然科学的仮説が成り立つはずだ。仮説を立てて検証してみたい！　さあ実け――」

「また来たんだ。実験には協力しないわよ」

「今日ものっけからつれないねェ……」

何か月か前からこのお店に来るようになった謎の科学者・アグネスタキオンさんだった。カフェさんとは同い年で、トゥインクル・シリーズではお互いにしのぎを削っていた一流のアスリートだった。

引退後、カフェさんはバリスタの道を選び、タキオンさんはスポーツ科学を極める研究者の道を選んだとのこと。日々研究と実験に明け暮れているけれども、時々癒(いや)しを求めてこの喫茶店に来る、というのはタキオンさんの弁。

タキオンさんの到来とアタシの元への訪問が月一の恒例行事なら、タキオンさんが来た

瞬間にカフェさんがこの席まで瞬間移動してきてタキオンさんの服の襟を掴んで引き剥がしにかかるのも月一の恒例行事だった。

「カフェ、首が絞まる、放してくれ！」

「タキオンさん、お店に来た瞬間に他のお客様にからみに行くのはやめてください。『お友だち』が警告しています。『次はオマエの部屋が一年ぶりに綺麗になるだろう……』と」

「て、テロには屈しないぞ！　かっ、これ以上はまずい、苦しい」

タキオンさんの顔が青くなってきたところで、ようやくカフェさんはタキオンさんを解放した。後半の方はカフェさんの手ではなく、何か別の存在によって絞め上げられていたような気がするけれど、深く立ち入るのはやめておく。ケホケホ咳き込んでいるタキオンさんに、カフェさんがさらに追い討ちをかけた。

「あと、ドーベルさんが来る日と時間は基本的に今だ、その時間に研究室を昼休みにしよう——と、声高らかに宣言していたのは一昨日のことでしたよね？　偶然を装った必然の演出じゃないですか……」

その言葉に、タキオンさんの顔が強張ったのが見えた。私とて創作活動をする身、それ以前に二十年は人生を送っているので、タキオンさんが月一とはいえ訪れるたびに声を掛

けてくる様子に、どう見ても実験の被験者を集めたいという意図以外のものがあると分からないわけじゃない。

とはいえ、意味を察したところで、それに対して自分がどう答えを出したらいいかまでは分からない。たぶんタキオンさんもそれを望んではいないだろう。いないと信じている、いや、信じたい。ただ、決して拒絶したいわけではない。どちらかと言えば、その方向性につながっていくことも構わない。

しばらく固まっていたタキオンさんがようやく動きを見せ、早口で言い募った。

「コホン。科学者たるもの、対象をじっくり観察して法則性を見出し、その法則が確かに成り立っているか確かめるのが重要なのだよ」

「照れ隠しはいいですから、ひとまずカウンターに座ってください」

カフェさんの後ろを、常ならざる力によって引きずられていくタキオンさんの声が耳に届いた。

「カフェ……ここで涙が百リットル出る薬の実験をやっていいかい？　被験者は私だ」

「営業妨害です」

涙が百リットル出る薬とか、どんな生き物でも干からびてミイラになってしまいそうな

んだけど、そんな薬を自分で試したら一巻の終わりになってしまうのでは。

少々余分……かもしれない時間が挟まってしまったものの、十分ほどでカフェさんがこちらに戻ってきた。

「お待たせしました。いつものオリジナルブレンドです」

「ありがとう」

一口。心地良い香りが身体に行き渡るように広がった。

「うん。美味しい」

「ありがとうございます」

「ドーベルさんはコーヒーをよく飲むのかい？」

テーブルの片隅からいきなりタキオンさんが顔を出した。すぐに見えざる手によってテーブルの下の方に押し戻されたけど、カフェさんの『お友だち』にあしらわれてばかりの様子を見ているだけなのも可哀想だったので、話に乗ることにした。

「そうね。ここに来るまではコーヒーはほとんど飲んだことがなくて、いつも紅茶だった。ここでマスターが淹れてくれるコーヒーに出会って、そしてカフェさんが淹れてくれ

るコーヒーも飲んで好きになった感じ。実は最近はマスターのコーヒーよりもカフェさんのコーヒーの方が好き」

「お褒めいただき光栄です……」

ちょっと恥ずかしそうに顔を隠すカフェさんの隣で、「お友だち」から何とか解放されて立ち上がったタキオンさんが若干不満気な表情で唇を尖らせた。

「ドーベルさんには原点である紅茶こそ似合うと思うんだがねェ。一度紅茶について語り合いたいものだよ。カフェ？　おすすめの紅茶を二人前頼むよ」

「当店では紅茶は取り扱っておりません」

「ならば私がこの店の片隅に置いておいた茶葉で淹れてご覧に入れよう」

「営業妨害です。というかいつの間に茶葉を運び込んだんです？」

「前々から少しず、ぐえっ、絞めないでくれギブギブ、」

カフェさんがカウンターに戻り、その後ろにまた謎の力で引きずられて行くタキオンさんが続いた。ピクリとも動かなくなったけど、あれは完全に絞まっちゃってるね……

アイデアを書き留め終わり、ノートを閉じて顔を上げると、お客さんが丁度途切れてい

た。次に何を注文しようか考えていると、カウンターの方から何かいつもと違う匂いが届いた。コーヒーの匂いに交じっているのは……紅茶の香り？　気になってそちらに歩いて行くと、何やら目を輝かせたタキオンさんがカフェさんと話をしていた。

「えんおうちゃ……？　初耳だねェ」

「香港でよく飲まれているそうです。あちらの言葉ですと『ユンヨン』と呼ぶようです。私は紅茶には疎いのできちんと良い味が出せているかは分かりませんが……」

「ふゥン？　どれどれ……うーん、紅茶の方はもっと修行が必要だね」

「そうですか……」

「で、こちらは……おっ！　これはこれは……」

カフェさんが差し出していた謎の飲み物に口をつけた瞬間、タキオンさんがさらに目を輝かせた。あと一押しで全身が輝きそうなくらいだった。

「最高だよカフェ！　これさえあればもはや敵無しだ！」

「大袈裟な……」

タキオンさんがそこまで激賞する飲み物が気になったので、カフェさんに頼んでみることにした。

「アタシもいただいていいかな、そのユンヨン？　ってやつ」
「ドーベルさん、すみません。そちらにお伺いできなくて」
「ううん。アタシもちょうど少し歩いて一息つこうと思ってたところ。とても美味しそうな匂いがしたから来ちゃった」
「そうですか……それでは鴛鴦茶を作りますね。鴛鴦茶にはホットとアイスがあるそうですが、ドーベルさんはどうなさいますか？」
「そうね……タキオンさんのがホットなら、アタシはアイスでお願い。これで飲み比べできそうだけど、どうかな？」
タキオンさんに話を振ってみた。タキオンさんは一瞬ぽかんとして、その後少し顔を赤らめながらにこやかに返事をくれた。
「なるほど、それはいい考えだ。さすがだドーベルさん！　貴方なら素晴らしいサイエンティストになれるだろう！」
「アタシは漫画家だけど」
「では漫画家兼サイエンティストはどうだろう？」
「三千年後にはなってるかもしれないね」

「せめて三千秒後で頼むぐッ！」
突然タキオンさんの口が封じられた。これが起きるのは十中八九「お友だち」のせいだった。
「……『お友だち』が機嫌を損ねてしまいました。しばらく静かにしていることをお勧めします」
「プハッ！　私は知っているぞ。カフェの『お友だち』はカフェの意向によってのみ私を封じにくごぶごッ、ッ！」
強制的に沈黙させられたタキオンさんが目を回してカウンターにもたれかかった。視線を少しずらすとカフェさんと目が合った。ちょっと顔が赤くなっている。
「何も、聞かなかったことにしてください……」
「え、ええ……」
そうしているうちにお湯が沸き、鴛鴦茶づくりが再開された。
「鴛鴦茶をアイスで作る時は、温かく淹れたものにクラッシュアイスを加えて冷やすそうです」

「へえー……」

ダージリン・ティーを淹れ、そこにちょうど抽出できたブレンドコーヒーを合わせて作るという。初めて見る飲み物で、カフェさんもこれが正しい作り方なのかどうかが分からないので、サトノクラウンさんに会ったら尋ねてみるとのこと。彼女はまだ学園在籍ながら香港をはじめ世界各国を飛び回る忙しい生活らしい。

細かく砕いた氷を入れて一気に鴛鴦茶を冷やし、仕上げに無糖の練乳、そして砂糖がたっぷりと入った。すごい。糖分を控えたい人がお茶を作っているシーンを見たら卒倒するに違いない。

「どうぞ……」

カフェさんからアイスの鴛鴦茶を受け取った。いつの間にかタキオンさんも復活していて、こちらに興味津々だった。

「いただきます」

飲んでみたら、とても新鮮な感覚だった。

「――最近だとなかなかない強い甘さと、紅茶の風味、コーヒーの苦みがマッチして、なんかいい感じかも」

「気に入っていただけて何よりです」
アイスの方をタキオンさんに渡し、代わりにホットの方を受け取って飲んでみた。こちらも美味しい。タキオンさんも満足げに頷いていた。
「うむ。アイスの方の鴛鴦茶もいいねえ。カフェ、鴛鴦茶をメニューに加えてみないかい？　これなら私も積極的に飲めそうだよ」
「……マスターのお許しがあれば」
「前向きな返事を期待しているよ」

それからタキオンさんの近況を尋ねてみた。「どうですか？」の一言に対して演説みたいに滔々と語り始め、創作の参考にできそうなところはところどころこっそりメモをしつつ聞いていたけど、さすがに二十分を過ぎたあたりからちょっとつらくなってきた。それを見かねたカフェさんが強制終了してくれた。

「それではドーベルさん、また会おう！」
颯爽と帰っていくタキオンさんを見送った。他のお客さんはまだ来ていなくて、つまり

カフェさんと二人きりになった。……近くに『お友だち』はいるかもしれないけど。
「今日はお騒がせしました……」
「ううん。カフェさんもお疲れ様」
「タキオンさんも困ったものですが……今日は、ちょっと意地悪をしてしまいました」
どんな意地悪？　とは聞かなかった。見ていれば、どの行動がそれだったかはすぐに分かる。しかし、なぜそこまでタキオンさんの行動を止めたかったのかはわからなかった。
「やはり、気になる方が他の方と話をしているのは、ちょっともやもやしますから……」
目が合う。視線がやや反らされた。
「少々、喋り過ぎました。忘れてくださると嬉しいです」
「え、ええ……」

『気になる方』と『他の方』が誰のことを指しているかは、ちょっと聞けなかった。もしそれに私が含まれているなら、なんともドラマみたいな展開だと思う。話の種には……なるかもしれないけど、さすがにまだ描けないかな。

第二話　ドーベルの特別な週末

（With スペシャルウィーク）

「ドーベルさん！　お付き合いしてください!!」
「んぐっ！　ゲホゴホゴホゴホッ!?」
「スペちゃん、肝心な言葉が抜けちゃってますよ〜」

昼休み、食堂でひとりでご飯を食べていたら後輩のスペとグラスワンダーさんがやって来て、いきなりスペから告白（？）された。びっくりして食べ物が喉に詰まって危うく死

ぬところだった。
「すみませ〜ん！」
「ふう……いいよ、気にしなくて。それでどんな用事？」
「はい！　今度の週末にスズカさんのプレゼント選びでご相談に乗っていただけたらと……」
「スズカのね。そういえば誕生日が近かったか。いいよ。アタシもいろいろ選びたいし」
「ありがとうございます！」
「ま、スズカだったらスペがくれるプレゼントなら何でも大切にしてくれそうだけど」
「できれば一番喜んでくれるようなものをプレゼントしたいので！」
「わかった。週末ね」
　スキップしながら離れていくスペ、その後をついていくグラスワンダーさんを見ながら、ふと考えた。何でアタシに相談しに来たんだろう？　グラスワンダーさんやエルコンドルパサーさん、キングヘイローさん、セイウンスカイさん、ツルマルツヨシさんみたいに同じ学年の子の方が聞きやすい気がする。アタシはスズカと同じ高等部とはいえ、交流はスペとスズカの方が多いはずだし、アタシに聞くよりスペ自身が考えて決めた方がいい

プレゼントが選べる気もした。
帰り際にグラスワンダーさんが意味深な視線を一瞬だけ向けてきたのが少し気になったけど、この時はすぐに忘れた。

週末。寮でおでかけの準備をしているとタイキが囃(はや)し立ててきた。
「スペちゃんとデートですネ！　頑張ってクダサイ!!」
「何を頑張るのよ……」
「えーっと、告白された時の返事デショウカ？」
「バカいわないで、そんなんじゃないから」
スペと出会ったのは半年くらい前、学園の図書館でのことだった。アタシがスズカと一緒に図書館に来たところ、机のところで教科書や参考書を前に目を回しているスペを見かけたのが始まり。スズカが声をかけに行ったところ、追試の追試になりそうだから助けてくれと号泣していたので、アタシが中等部時代に作って今でもとっておいたノートを貸して勉強に付き合った。
ちなみにその一対一の講座の時に、なぜか横でスズカも目をキラキラさせて聞いてい

た。スズカも分からなかったところがようやく分かるようになったとのことだった。
それから、食堂や図書館で会ったら少し言葉を交わすくらいの関係になった。会う回数は少ないとはいえ、プライベート寄りの話はスズカからしょっちゅう聞いていたし、レースの方でも頭角を現しつつあると学園内で話題になっていたので、どんな感じの子かはある程度は知っていた。さすがにいきなり告白（？）されるところまでは想像できていなかったけど。

スペとの待ち合わせは学園の門の前にしていた。アタシが美浦寮、スペが栗東寮だったのでそちらの方が集まりやすいと思ったからだった。でも、寮の玄関を出たらなぜかそこにスペがいた。
「おはようございますドーベルさん！」
「おはよう。待ち合わせは学園の門の前だったはずよね？」
「はい！　早く出ちゃったので美浦寮まで来ちゃいました！」
「そうなんだ……」
とても気合が入っている。服もかわいらしかった。せっかくちょっと早めに来てくれた

んだから、早めにモールに行こう。
「じゃ、行こうか」
「はい！」

後輩と出かけるのはなんだかかなり久々な気がする。一緒に出かけるのはいつもマックイーンやブライト、ライアンといった身内ばかりだった。……あ、一応デジタルも学年的には後輩か。同志だからあまり後輩として捉えることがなかった。
「そういえば」
「はい！」
「まだ聞いてなかったと思うんだけど、どうしてスズカへのプレゼント選びでアタシを指名したの？　こういうのは同い年くらいの友達でワイワイやりながら選んだ方がいろいろ意見も出て良さそうな気がするけれど」
「はい、それは、ええと、あれです！　やはり先輩的視点だともっといいアイデアが生まれるかもしれないと思って！」
「そんなものかな」

「そんなものです！」
「うーん、まあ、相談をもらったからには力を尽くすけど」
「ありがとうございます！」
プレゼントのアドバイスの参考にするために、スペから見たスズカのことを話してもらった。さすがは同室の憧れの先輩のことだけあって、アタシが知らないスズカのことをたくさん教えてくれた。中には「それ多分スペ以外、スズカでさえも知らないスズカの癖だと思う……」的なものもあったりした。
「この前のスズカさんもすごかったんです！　朝早く目が覚めたらスズカさんがもうジョギングに出かける支度をしてて、私も一緒に走ったんですけど、スズカさんは適度に休憩しつつひたすら走り続けるんです」
「確かに、スペが来る前のスズカは暇さえあれば走ってるような感じだったね」
「いつの間にか結構な山の中まで行っちゃってたんで、どこかの駅前で声をかけて折り返したんですけど、結局往復で八十キロくらいになってました！」
「どこまで行ったのそれ……」
「えーっと、確か建物のところに『奥多摩駅』って書かれてました！」

「奥多摩!?」
休みの日は通勤電車が通勤ラッシュなみのハイキング客を詰め込んでやって来るらしい山奥の駅で、確かにあのあたりまで行ってしまっていたら往復で八十キロにもなるか。
「ドーベルさんから見たスズカさんってどんな感じでしたか？」
「そうね。……どことなく危なっかしいというか、放っておくとそのままどこまでも遠くに走って行ってしまいそうだったから、いつもまわりで誰かが見守ってないといけないかなって感じだった」
「そうだったんですか！　みんなの面倒を見てくれる優しいお姉さんな感じはどこ行っちゃったんですか!?」
「あれはたぶんスペが同室になってからだと思う。かわいい妹みたいな子だから自分がしっかり守らなきゃ、って思ったのかも」
「確かにいろいろ教えてくれます！　でもスズカさんにそんなに心配かけちゃってるのかな……」
「スズカがスペの話をしてくれる時は結構心配してる。アタシからしたらスズカの方も心配になるけど」

つくづく、スズカの同室が彼女で良かったと思う。スズカは寝ても覚めてもただ走ることだけを考えている節があって、会話の受け答えでも自然に走ることに結びつけたり、何かあるたびに走りに行こうとするので、スズカとの交流が浅い人は走りを追求するストイックなアスリートだと思い、そこそこ長い人は彼女のことを天然ボケキャラと思うに違いない。ただこれはどちらも正しくなくて、スズカの走りは心身にあらかじめインプットされた本能に近い欲求のように見えた。それがスペのおかげで表情が豊かになり、人間味が増した感がある。

「ドーベルさんってスズカさんを見守るお母さんみたいな感じですね！　お世話をするお母さんがエアグルーヴ先輩で……」

「そう……」

「なんというか、その、とってもすごいと思います！」

「ありがと」

とてもキラキラした目で、ちょっと顔を赤くした表情で褒めてくれた。なんかちょっと恥ずかしくなったので少し早足になった。

目的地のモールにたどり着くと、すでに家族連れやカップルでにぎやかだった。
「いつ来ても人がいっぱいですね！」
「そうね。いつもは友達と来るの？」
「はい！　エルちゃんやグラスちゃん、キングちゃん、スカイちゃん、ツルちゃんと来てます！」
「楽しそう」
「ドーベルさんは誰と来てるんですか？」
「だいたいは身内かな。マックイーンとかブライトとか、ライアンとか」
「お友達や先輩方や後輩と来るのは……？」
「ほとんどない、って今気付いた。たぶんスペとこうして行くのが数年ぶりの身内以外とのモールかも。もしかしたら初めて――ではないかさすがに」
「そうですかー、えへへ。じゃあ私がドーベルさんの数年ぶりのお相手ってことで！」
にへら、としたほわほわな笑顔を見せられて、思わず心臓が高鳴ってしまった。自分でもなぜかよく分からない。単に後輩がかわいい、というところから来る心の動きとは何だか違った。

「スズカへのプレゼントはどんな方向性にしたい？」
「そうですねー……、普段づかいのものはスズカさんのこだわりの一品がありそうですから、ちょっと身につけられそうなアクセサリーとか置物がいいんじゃないかなって思ってます」
「そうね。そんな感じが良さそう」
　というわけで、第一の行き先は雑貨屋さんになった。スズカに似合いそうなアクセサリーが何かと考えてみたものの、なかなか出てこなかった。たぶん、アタシが普段見ているスズカが学園で走っている光景ばかりで、日常生活や休みの日の様子をあまり見ていないから。もしかしたら、いや、もしかしなくてもスペの方が知っているんじゃないかな。
「どう？　良さげなものは見つかった？」
「はい！」
　アタシがしたのはスペが選ぶ物に色や形について多少アドバイスしたくらいで、大部分は自力で選んでいた。
「小さめのヘアアクセサリーにしました。スズカさんの私服と勝負服に合う感じで、走る

時も邪魔にならないような感じになればいいなって」
「いいねこれ。とてもいいセンスだと思うな」
「ドーベルさんのアドバイスのおかげです！」
「ほとんどあなたが選んでたから、別にアタシのアドバイスとかじゃなくて、スペの感覚を誇っていいと思う」
「ありがとうございます！」
スペの笑顔にまたどきっとした。物理的な距離がさっきより近い気がした。
「次はドーベルさんのプレゼント選びですね！　どんなのにしますか？」
「アタシは……アロマオイルにしようかな。スズカはそろそろレースがあるし、いつもの調合よりもっとリラックスできそうな感じのものにしたくて、そのための材料を買い足す感じ」
「なるほど！　ドーベルさんのアロマって私のクラスでも結構話題になります！　いろいろ話を聞いたりしたいって友達はいっぱいいるんですけど、レースでたくさん勝ってる高等部のすごい先輩だから恐れ多いとか、みんなで押し掛けたら迷惑になりそうだから、ってみんな尻込みしちゃってるみたいで……」

「アタシのは本を読んだだけの独学だから……本は紹介することはできるけど……」
「独学ですか!?　すごいですね……」
「そんなことない、かな」
スペにアロマの本をいくつか教えたら、早速お友達に知らせたらしい。すぐに返事が来たようで、アタシに見せてくれたトーク画面でみんなからとても崇拝（？）されていてちょっと怖かったのは秘密。
「スペもアロマには興味あったりする？」
「はい！」
アロマ専門店に着いて、売り場を回って自分がほしいものを選びつつスペに解説した。目をキラキラさせて聞いてくれるので、中身がまだ本の受け売りばかりなのがちょっと申し訳なくなった。
「私に合うアロマってどんな感じのなのかなー……」
「そうね、選び方にもいろいろな方向性があって、リラックスしたいとか、集中したいとか、ダイエットだとか」
「ダイエットにも効くのがあるんですか!?」

「え、ええ……アニシードとフェンネルの組み合わせの香りが効果があるって前調べて……」

「欲しいです！　あ、その……私よく食べ過ぎちゃって、体重コントロールがつらくて……」

「なるほど」

体重コントロールは多くの生徒にとって切実な課題で、現にアタシのところにも何件か相談が来ていた。その際に調べて教えていたのがさっきの組み合わせだった。

「そうね、アタシがスズカに渡す分とマッチするように選ぶなら、このあたりが同じ効果を発揮できそうかな」

「ありがとうございます！」

アロマオイルはそこそこ値段がするのでスペの分もプレゼントしようとしたらちょっと揉めた。

「そんな！　私の分は私が出します！」

「これ結構高いよ？」

「大丈夫です！」

この後のランチのことも考えて計算したところ、スペの財布がカラッポになってしまうことが発覚したのでアタシからのプレゼントということにした。
「一生の宝物にします！」
「使ってね……？」

スズカへのプレゼントを無事に買えたので、ちょっと早めだけどランチにした。スペにお勧めの店に連れて行ってもらったら大当たりだった。
「さすがね。これから美味しいお店を探したい時はスペ先生に頼もうかな」
「いえいえ先生だなんてそんな！　ドーベルさんの方がおしゃれなお店とかご存知なんじゃないですか？」
「アタシはライアンやアルダンさん、ラモーヌさんから聞いてるけど、実は自分ではなかなか行ったことがなくて、その点だときちんと行って食べてるスペの方が信頼できる」
「えへへ……」
自然な、嬉しさが全面からあふれ出ている笑顔を見て、思わずこちらの気持ちもふわふわと温かく、あるいはちょっとくすぐったい気持ちになった。そのまま手を伸ばして頭を

なでたくなったけど我慢した。

料理を食べ終えて一息ついたところ、スペが物足りなさそうな目でメニューをチラリチラリと見ていることに気がついた。

「デザート行っとく？」

「え？　でもお財布の中身が……」

「なるほど……じゃあ美味しいお店をアタシに教えてくれたお礼をさせて？」

「でも……」

「じゃあペアメニューにしよっか。アタシはたぶん少ししか入らないから、後はスペが食べてくれると嬉しい」

「はい！」

ペア用の特大パフェを注文して二人で食べた。フードファイトで出てきそうなくらいにとても大きくて、二人でも食べられるかどうか心配したけれど杞憂だった。アタシが少しだけ楽しんで、残りはスペが平らげてくれた。とても幸せそうな笑顔で見ていてほっこりしたけど、おなかがぽっこりしてしまったのが見えてしまったので、スペのトレーナーに謝っておかないといけない。ごめんなさい。

少し休憩したら、午後からはもっぱらウインドウショッピングをして過ごした。いつもは回らないお店に行ったりして、スペからいろいろと説明を聞いたり、逆にアタシが知っていることがあればちょこっと教えたりして、とても収穫があった。

「なんかいい時間になったし、そろそろ帰る？　ゆっくり散歩して、途中で公園とかに寄ったりしてたらいい時間に寮に着きそうだし」

「そうですね……」

少し名残り惜しそうなスペを連れてモールを出発した。公園までの道中はお互いに言葉が少なめだった。

公園に着いて、自販機で小さめのお茶を買って、一本をスペに渡した。

「ありがとうございます」

「お疲れ様。だいぶ疲れたでしょ？」

「いえ！　楽しくて疲れが吹っ飛んじゃいました！」

「そう？　……今日はありがとね。スペのおかげでスズカのプレゼントを楽しく選べたし、面白いお店を知ることもできた」

「お礼を言うのは私の方です！　いきなりお誘いしたのにすぐにいいよって言ってくれて、こうしてお付き合いいただけて……」
「まあ、時間はたっぷり空いてたし、ちょくちょく交流はあったし、スズカからもいろいろ聞いてる後輩からの頼みだったからね」
しばし静寂（せいじゃく）があって、スペがぽつりとつぶやいた。

「ドーベルさんって、とても優しいんですね」
「別にそんなことはない。ただ、困ってたら少し話を聞いてアドバイスするだけ」
「それだけでもいいんです。いえ、それが、いいんです」
「そう？」
「はい。そんなドーベルさんのことが好きです」
「ありがと」
そう返事をしたところ、スペがこちらを見て身を乗り出してきて、アタシの右手首をつかむような形になった。その顔はちょっと怒ったような、あるいは今にも泣きだしそうな

表情だった。

「私の『好き』がちゃんと伝わってないみたいなので、もっと言わせてください。ドーベルさんが好きです。『ライク』じゃなくて『ラブ』の、ほう、で、しゅ……」

スペがそのまま固まってしまった。アタシもいきなり頭が動きを止めてしまったような感覚になった。顔が熱いのが自分でも分かった。

「とりあえず……一息入れよっか……」

顔を真っ赤にしたままふわふわと頷(うなず)くスペを支えつつ、またベンチに深く腰掛けた。椅子の背にもたれかかった瞬間どっと肩の力が抜けて、半分くらいスペに寄りかかる形になった。そしてスペもアタシの方にもたれかかった。

「……スペ」

「……はい……」

「正直、とてもびっくりして、どきどきしてる」

「そう、ですよね」

自分でもここまで感情がかき乱されるとは思わなかった。ただの先輩、後輩の関係だったはずなのに、たった数分で深く意識させられるところに急に放り込まれてしまった。ス

ペの頭が触れているところが熱く、時々アタシの頬をなでる耳の動きがくすぐったくて、ますますどきどきしてきた。

「変なこといきなり言ってごめんなさい。さっきのことは忘れてください」

「謝ることはない」

とっさに声が出た。まだ考えも何もまとまってはいないけど、それだけは真っ先に伝えなきゃいけない。そう思った。今の複雑な、でも決して拒絶ではない気持ちを伝えたくて、スペの手を握った。それからしばらくお互いに身じろぎせず、沈黙していた。しばらくして、ようやく口を開くことができた。

「まださすがに整理はついてないし、よくわからない。でも、自分でも不思議だなって思うんだけど、嫌なわけじゃない。これは本当」

「ドーベルさん……」

こんな時にどうしたらいいのかわからず、ふと思いついてスペの肩をそっと抱き寄せてみた。

「ひゃっ！」

「……思いつきでこうしちゃったけど、嫌じゃない？」

「いいい嫌だなんてそんな！　むしろどきどきしてびっくりして、魂がどこか飛んでいっちゃいそうです……」

「奇遇ね。私もどきどきし過ぎて気絶しちゃいそう……」

今まで何回か、漫画でこんな感じの展開を描いたことはある。今までは自然に仲良くして、どちらからともなくキ……キスをして、そこでハッピーエンドにしたり、楽しくデートの続きをしたり、みたいなストーリーを描いてたけど、それは二つの意味で「甘い」シーン描写だったと分かってしまった。

……アハハ、どきどきし過ぎて身動きひとつ取れないや。いや、身動きが取れないくらいがいいかもしれない。動けるくらい意思がはっきりしたら、もうスペを連れ去って、……ヘンな想像をしてしまった。想像の結末は、アタシがメジロ家の手で幽閉されるか、グラスさんに切腹を申し渡されるシーンだった。

気がつくと、横から鼻をすする音が聞こえてきた。

「スペ……泣いてる？」

「……泣いてます。でも悲しいからじゃないです。なんだか、あったかくて」

「そっか……」
　またしばらく、そのまま静かに過ごした。
「……ねえ、スペ」
「はい」
「アタシね、スペが好きなのはスズカの方だと思ってた」
「はい。スズカさんは私にとって憧れの人です。でもそれは好きは好きでも『ライク』の方なんだと思います」
「うん」
「ドーベルさんに言った『好き』は『ラブ』に近い、かもです。勉強を教えてくれた時の優しさとか笑顔、スズカさんの話に出てくるドーベルさんのエピソードとか、聞いてたら心がぽかぽかしてきて、いつの間にか心臓がどきどきして熱くなるようになって、ドーベルさんを見かけた時にぼーっとしてたら、セイちゃんが『これは恋の予感ですね～スペちゃん？』ってからかってきて、それで、やっぱり恋なんだなって」
「……ありがとう」
「えっ、あ、お、お礼なんて！」

「言わせて。アタシは今までこんな感じの気持ちになったことはなかった。ライブでよく歌うあの曲の歌詞っぽく言えば『こんな想いは初めて』、ね。誰かを好きになるってこんな感じなんだ、って初めて分かった」

「ドーベルさん……」

他の子達みたいにトレーナーと付き合うなんてこともなく、考えすらしていなかったので、高等部にもなってどきどきする人に出会えるなんて思ってなかった。この後寮に帰るまで、どうやって過ごしたらいいかも全く分からないウブさ加減だけど、スペとずっと一緒にいられたらいいなと思う。

「……そうだ。スペ、ちょっと目を閉じて」

「あっ、はい……」

スペの額のところの髪をすこしよけて、軽くキスをした。今のアタシにはこれが精一杯。

「これからよろしくね、スペ」

返事はなかった。

「……スペ？」

目は閉じている。顔は真っ赤、耳もピンと固まっていた。

気絶していた。

○　○　○

「……はっ！　え、ここは、あ、ドドドドドーベルさん！？？」

「目、覚めた？」

スペが目を覚ますまで膝枕（ひざまくら）をしていた。急にびっくりさせちゃったことの罪滅ぼしみたいなものだった。そういうことにしておきたい。決して「こういう時は膝枕をする！」という知識を実践したい好奇心や、愛しの後輩を間近で見ながら髪などをなでたいという欲望がメインだったわけじゃない。うん。そういうことにしといて。

「すみません……気を失っちゃって」

「ううん……こちらこそ急に、……ごめん」
「いえ……嬉しかったです」
「良かった」
だいぶ長い時間が経ってしまってたみたいで、日が沈みかけていた。
「帰ろっか」
「はい！」
寮までの帰り道のお喋りはとても弾んだ。寮の前で別れて部屋に戻るとニヤニヤ笑うタイキに出迎えられた。
「今日は……ええっと、オタノシミデシタネ？」
「そんなんじゃないから。あとその言葉どこで習ったの？」
「ドーベルが貸してくれた本デス！」
「……貸す本はこれから考えなきゃね……」
「それでどうだったんデスカ⁉」
「何もないったら。スズカへのプレゼントを一緒に買って、ちょっと見て回って、それだけ」

「あくまでシラを切るつもりデスネ？　今ならまだゆるされマスヨ？」
「だから何もないってば」
タイキがじっと見つめてくること数秒、大きくため息をついて首を振った。
「やはり誘導尋問には引っ掛かりませんでしたカ……」
やっぱり。
「誘導尋問はやめてよね」
アタシがタイキに背中を向けたその時、背後から言葉で一突きされた。
「ヒザマクラ？　したときはどんな気分でシタカ？」
「見てたの!?」
とっさに反応し、タイキの表情を見て自滅したことに気づいた。
「No. ドーベルが貸してくれた本の中にカップルがヒザマクラ、というものをしていたシーンがありまシタから、カマをかけてみまシタガ…… Congratulations!」
「うう……」
それから洗いざらい喋らされた。思い返してみるとあまりにもアタシらしくない大胆な行動の数々に、恥ずかしくてダートに埋まりたくなった。

翌、日曜日の朝。散歩していてスズカにたまたま会ったら、開口一番「スペちゃんとお付き合いするって聞いたわ。おめでとう」とにこやかに言われて爆発四散した。ちなみにスズカの髪にはスペが選んだヘアアクセサリーが小さく、さりげなくその存在を主張していた。

その直後に会ったデジタルからは「神に等しき方のご結婚に最大級の祝福をーッ！」と花束を渡された。デジタルがどこから聞きつけて来たのかは分からないけど、彼女ならラブコメの波動を感じ取って勝手に来そうだなと思った。ただ一点ツッコませてほしい。『結婚』じゃない。

どっと疲れて、花束を持ったままヨロヨロ歩いていたらスペに遭遇した。

「あ……ドーベルさん、おはようございます」

「お、はよう、スペ」

「その花束どうしたんですか？」

「デジたん――アグネスデジタルさんに急に渡された。なんか結婚だとか祝福だとか言ってたけど」

「結婚……もう準備した方がいいんでしょうか？」
「目を覚ましてスペ。さすがにまだ早い」
我に返ったスペが真っ赤になって撃沈してしまったので近所のベンチに座らせ、立ち直るまでそばにいた。
「すみません……」
「まあ、なんというか、ゆっくりやろっか……」
「はい……」

可愛い後輩が恋人になった週末、明日からまた始まる学園生活でどのようにお付き合い？　をしていくか考えつつ、ずっと一緒にいられたらいいなと願った。

第三話　千直漫才

（With サイレンススズカ）

ファン感謝祭の日。昨年は急に熱を出してしまって参加できなかったので、今年は体調を万全に整えて参加した。ファンの方々と交流できたり、友達と祭りを見物できてとても楽しんでいたけど、突然半ば連れ去られるようにして特設ステージの上まで運ばれてしまい、人生最大の局面に遭遇していた。

「おっ、メジロドーベル選手が引いたくじには『漫才！』と書かれているぜ！　ステージ

に立つウマ娘の中に同じ中身のくじを引いたヤツがいるはずだ！　サア手を上げろっ！」
お祭りが似合うウマ娘のひとり、先輩だと思うけれども年齢不詳なトラブルメーカー・ゴールドシップ先輩がマイクを持ってシャウトしていた。
「あの……私です……」
「スズカだあッ！　サイレンススズカ選手がドーベル選手の相方になったぜコノヤロー！　じゃ、今からシンキングタイム三分な。ネタに時間制限はないから好き勝手やってくれよな！」
「ちょっ、待っ」
アタシの叫びも空しく、ゴールドシップ先輩はマイクを置いて焼そばの立ち売りをしに走って行ってしまった。
「えー、ようやく司会用マイクを取り戻せたサクラチヨノオーです。あのくじには『漫才』は入っていなかったはずなので、ゴールドシップさんが混ぜ込んじゃったんだと思います」
それなら漫才はやらなくていいんじゃないか。チヨノオーさんの言葉に安心してステージを去ろうとしたところ、チヨノオーさんから驚愕の一言を受けた。

「でも、ここにお越しのみなさんがすっかり盛り上がっちゃって、ドーベルさんとスズカさんの漫才を心待ちにしていらっしゃいますので、ここはひとつお願いできませんか？」
「え、いや」
「お願いしますっ！」
チヨノオーさんに勢い良く頭を下げられてしまい、衆人環視（しゅうじんかんし）のステージということもあってとても断りづらくなっていたところ、さらに追い討ちをかけられた。
「あの……私とドーベルで良ければ……」
「スズカさんありがとうございます!!」
スズカの性格なら辞退してくれると思い込んでいたのが運の尽きだった。スズカの承諾を言質（げんち）とばかりに食い気味にチヨノオーさんが頭を下げ、しかもスズカの返事も含めて会場にはすべて筒抜け。客席からは大歓声が響いてきた。
「嘘でしょ……」
万事休す。

○　○　○

「シンキングタイムは必要ですか？」
「……二十四時間ちょうだい？」
「わかりました！　って！　それじゃステージどころかこのお祭りが終わっちゃいますよー！」
シンキングタイムはゴールドシップ先輩が言っていた通りの三分にした。三分どころか三時間、三日かけても何もネタが浮かばないから、この三分間は単に気持ちを落ち着けるための時間だった。
「三分間待ってやる」
急にどこかからサングラスを取り出して掛け、どこかで聞いたようなセリフを口にしつつ手をピストルの形にしてアタシとスズカの方を指して後ろに下がった。
「ちょっと、スズカどうするの!?」

「ごめんなさい。チヨノオーさんからワンちゃんみたいなうるうる目で見つめられたら断り切れなくて……」
「何かネタある!?」
「私は特に何も……ドーベルの方がいろいろ持ってるんじゃない？　タイキから聞いたわ。いっぱいいろいろなお話を書いてるんですって？」
終了。あの同室のデカいdoggyを処す。何でペラペラ喋っちゃってるの。後でタイキとトレーナーの様子をノンフィクションラブコメ漫画にしようと誓った。
「ドーベル？　大丈夫？」
「……わかった。私がなんとかする。スズカは私の話に何も考えずに素で返して」
「それでいいの？」
「大丈夫」
まず初手でやるべきことをスズカに伝え、チヨノオーさんの方に向き直った。チヨノオーさんはサングラスを掛けたままこちらに歩み寄り、予想通りの言葉を口にした。
「答えを聞こう」
スズカと手を組んで返事した。

「「バルス！」」
もちろん会場は一気に沸き上がった。目を押さえてステージ上をのた打ち回るパフォーマンスを見せたチョノオーさんが転がるようにステージ脇にはけた後が本番だった。

「こんにちは。メジロドーベルです」
「えっと……サイレンススズカ、です？」
「そこは疑問形じゃないでしょ」
ゴールドシップ先輩がステージ脇に置き去りにしていた段ボール箱からピコピコハンマーを取り出してスズカの頭をピコンと叩いた。
「痛い……」
「いやピコンってしただけだから！　ピコハンで相手を倒す怪力とかじゃないから!?」
ガチで頭を押さえてうずくまるスズカを助け起こしたところで会場がまたどっと沸いた。お客さんがノッている余興なので勢いだけで押し切ってしまう作戦だった。スズカは結構な割合で天然っぽいリアクションをしてくれるので、そこに乗っかって進めてしまおうと決めていた。

何でこんなことをやっているんだとか、恥ずかしすぎて死にそうだとか、なんか大事なものをどんどん悪魔に切り売りしているような気がしなくもなかったけど、ここまできたらやり切るしかない。

「スズカ、今朝何食べた？」
「えっと……何か面白いことを言った方がいいのかしら」
「大丈夫、そのまま聞かせて」
「そう。今朝はご飯を食べたわ。食堂のおいしいご飯」
「どんなものかみんなに紹介してあげて」
「ええ、おいしい白ご飯に、おいしいお味噌汁に、おいしいサラダに、おいしい……スペちゃん」
「最後の何!?」
会場がどよめく。ノリがいいお客さんで良かった。
「ごめんなさい。ご飯を食べてた時にちょうど横にスペちゃんが来たの。ご飯をいっぱい載せてきて。いっぱいの白ご飯、ちょっと多めのお味噌汁、お料理の時に使うくらいの大

きさのボウル山盛りのサラダで、それをとっても美味しそうに食べててほっこりしたわ」
「スペの食事は意外と健康そうね」
「あ、でも昨日の夜は超特大のハンバーグを三枚重ねにして食べてたわ。付け合わせのにんじん丸一本もスペちゃんが食べてるととても美味しそうで」
遠くから「スズカさんそれをバラさないでください！　あ、トレーナーさんこれには深い訳がああああーーーーッ！」ととあるウマ娘Ｓの断末魔の叫び声が聞こえた。ごめんスペ。あとでお詫びのスイーツを差し入れるから。

「ドーベルの朝ご飯はどんな感じ？」
「えっと、アタシはだいたいパンかな。スクランブルエッグとハム、そしてサラダが多いかな。時々スープもつける」
「そのスープはみそスープかしら？」
「そう、みそスー……、それ普通にお味噌汁でよくない？」
「ちょっと使ってみたかったの。最近読んだマンガである話にこの言葉が出てきてて、面白いかなって思ったから。会場のみんなは読んだことあるかしら？」

急に会場に質問を投げるスズカ。そしてそれに結構な人が「あるーっ！」と答えを返していた。何だろうそのシュールな漫画。後学のためにもちょっと読んでおきたい。

「そのマンガだと一足す一をするとみそスープになるらしいんだけど、ドーベルは『一』って何だと思う？」

「うーん……料理の腕と……愛情？」

「素敵ね」

会場がさらに沸いた。なんかとっさに恥ずかしい言葉を出してしまった気がするけれど、もう気にしない。

「スズカは何が『一』だと思うの？」

「えーっと、そうね……『一番の美味しさ』の『一』と、『一番の食材』の『一』」

「なんか、深いね……」

「――って、この間オグリ先輩が教えてくれたわ」

「オグリさんの言葉そのままかっ！」

観客席から盛大な拍手が起きた。そちらの方を見ると、最後列の端の方でオグリさんとタマモクロスさんが腕組みをしてうんうんと頷いていた。

「さて、なんだか漫才じゃなくてアタシとスズカの対談みたいになっちゃってるけど、最後に学園の生徒らしくレースの話で締めますか」
「そうね、レースの話はとてもわくわくするわ」
「じゃあ、もしスズカが芝・中距離以外のコースを走るならどこを走ってみたい？　レースに勝つかどうかじゃなくて、トレーニングの一環という感じで」
「うーん……実はひとつ気になるコースがあるの」
「どこ？」
「新潟レース場の直線コース」
新潟レース場だけが持つ特殊なコース、芝1000mの直線で、通称は『新潟千直（にいがたせんちょく）』、あるいは単に『千直』。コーナーが全くなく、スタートしたら1000m先のゴールまで一直線に全力疾走する。ヒトの短距離走であれば直線コースは普通にあるけれど、トゥインクル・シリーズをはじめとするウマ娘向けの短距離レースはここで開かれる分だけしかない。
コースが特殊なのと、このコースを使う最高峰・GⅢのアイビスサマーダッシュが学園の夏合宿期間に思いきり被るのとで、千直を積極的に選ぶトレーナーは変わり者とされ

る。でも中にはチーム全員を必ず走らせるトレーナーもいるらしい。
「あのコースね……」
「どこまでも一直線に走るコースを、ひたすら先頭で駆け抜けられるかしら？」
「――アタシがいるから無理ね」
あえての物言いにどよめきが聞こえた。どう考えても宣戦布告にしか聞こえないけれども、これは言いたかった。
「本当？」
スズカが首をかしげて返した。一見いつものほわほわした感じに見えるけれど、目の奥に闘志の炎がちらつき始めている。
「アタシとスズカは同じ中距離選手だけど、スズカはどちらかと言えば長めの距離が得意で、アタシはマイル寄りが得意」
「……そうね」
「あと、アタシはメイクデビューが短距離で、実は新潟でちょっと走ったこともある」
さらに焚きつけ、言い切りの言葉を放った。
「だから、新潟千直ではアタシが勝つ」

……ちょっとやり過ぎて恥ずかしくなってきた。会場のボルテージが上がる。それに対してスズカが口を開いたその瞬間、チヨノオーさんの声が割って入った。
「すみませーん！　とても盛り上がっているところ申し訳ありませんが、この後の時間が押しているので、えーと、『続きはトレセン学園公式チャンネルで！』です！」
よかった。なんとか乗り切った。ヘンなアンコールがかかる前に逃げよう。
「ありがとうございました！」

二人で走ってステージから駆け降りたあたりでスズカが声をかけてきた。
「ドーベル」
「お疲れ様スズカ。何か食べに行く？」
「えっと……さっきのステージでの言葉だけど……」
「どれ？」
「『新潟千直ならアタシが勝つ』って言葉」
「あー、あれ……」
アタシの主戦場の距離ではないけど、なんとなく直感であそこなら走れるんじゃない

かって気がしたのは本当。

「私が勝つわ。先頭は譲らない。今から走ってくるから」

「え、ちょっと」

スズカが勢いで飛び出して行き、慌てて追いかけようとしたところで止まってこちらを振り向いた。

「冗談。でも一度はあの一直線のフィールドを走ってみたいわ。普段と全く違う距離、コーナーがないコース、なんだか楽しそう」

「そうね……お互いのトレーナーに頼んでみる？」

「それがいいかも」

アタシのあのヘンなトレーナーなら、アタシがいきなり新潟千直を走りたいと言ってもすぐに了承してくれそうだし、トレーニングの一環としては走ってみたい。もしかしたら頼めば出走登録までしてしまいそうな気がするけど、タイム的には短距離のジュニア級未勝利戦の選手にようやく混じれるかぐらいのタイムしか出なさそうなので、本当のレースは勘弁。

○　○　○

なお、さっきの漫才（？）が実はスズカとの打ち合わせの部分からばっちりマイクで拾われて会場に大音量で流されていて、アタシの創作活動が全校生徒にバレてしまっていたことが発覚したのは後夜祭のあとだった。

ブライトに「ドーベルの書いたお話、読んでみたいですわ～」と言われ、ライアンからもきらきらした目で応援された。

学園生活が終わった。たびにでますさがさないでください。

第四話　イベント戦線異状なし

（With アグネスデジタル）

「どぼ師匠！　今年もついにここまで来ましたねえ……デュフフフフ……」
「ヘンな笑い声出さないのデジたん」
「失礼、取り乱しました」
数多くある同人イベントの中で最も有名な年二回の祭典に、今年もサークル参加できた。冬は大きなレースがあったりしてバタバタする一方、夏は合宿日程をうまく調整すれば一旦学園の寮に戻って、そこを拠点に真なる頂上決戦に参戦できる。ただ、今のところ

アタシもデジたん――後輩のアグネスデジタルも、この活動は外には秘密にしていた。デジたんのルームメイトのタキオン、アタシのルームメイトのタイキにはバレてるかもしれない。ただ、両方とも特に何も言ってこないのでもしかしたらバレてないかもしれない。

今回はデジたんとアタシで一つのサークルを組んで出している。申し込みの時にサークル名をどうするかで議論が紛糾（ふんきゅう）して、最後はアタシがデジたんを抱き締めて昇天させて口を封じた。……何の前触れもなく意識が落ちて安らかな顔になってしまったので本当に昇天してしまったかと思った。ウマ娘が接近すると昇天してしまうようでは取材？　ができないんじゃないかと心配になるけど、でもちゃんとトレセン風の舞台で学園恋愛ものを描けてるから大丈夫なのかな。

「配置どこだっけ？」

「東４ホールです師匠！　お誕生日席なので捗りますね！」

「誰か知ってる人が来たら身バレしやすそうね……」

創作系のサークルが集う一角ではすでに設営作業が始まっていて、近所のサークルさんに挨拶をして設営を始めた。とはいえ今回はお互い新刊一点、既刊一点なので並べ方はシ

ンプル。テーブルクロスを敷いて見本用のスタンドを置いて、小さめのおしながきを添えたらこれで完了。それぞれのＳＮＳアカウントで設営完了報告して、馴染みのサークルさんのところに挨拶と新刊交換をしに行った。

「おはようございます」

「めじろ先生お久しぶりです！　新刊心待ちにしておりました！」

「ありがとうございます。こちらをどうぞ」

「ありがとうございます!!　神棚にお供えして毎日三回拝ませて頂きます！」

「普通に読んでください……」

「今回は別の方と合同だと聞きましたが」

「はい。同じ学校の後輩で、普段は芸能系評論・情報の方でウマ娘活動ルポみたいなのを書いてるんですが、今回は創作に挑戦してみたいということで一緒に組むことにしました」

「なるほど。それは面白そうですね……では初手でスペースに馳せ参じます！」

「慌てなくて大丈夫ですよ……」

自分のスペースに帰ると、他のサークルさんと交換した新刊を読みふけっている同志がいた。顔がゆるみ過ぎて完全に溶けてしまっている。ついでに口の端からよだれも垂れかけていた。ほっとくと顔のパーツが福笑いになってしまいそうだし、乙女が見せるには少々はばかられる状態だった。……いや、学園では結構な割合でこんな顔になってたねそういえば。

「『アリス先生』、顔がヘチャってなってるよ。あとよだれ」

「……んあ？　あ！　ここここれは失礼しました！　はしたない姿を……」

「いつものことだから気にはしてないけど」

「あたしいつもそんな顔してるんですか⁉　恥ずかしいです……」

「自覚なかったか……」

開場すると、人が徐々にやってきた。外で待機していた大勢の人はこの時間は別のホールや企業スペースに押し掛けているので、ピークはもう少し後の方になる。それでも開幕数分で最初の訪問者があって、アタシの新刊とデジたんの新刊を買って行ってくれた。その一番乗りの人はウマ娘だった。

その次に先ほどの馴染みのサークル主さんが来て、一番手を取り損ねたことを悔しがっていた。今まで六連覇してたんだからそろそろ譲ってもいいのではと伝えたら、すぐに笑顔になってくれた。ちなみにデジたんの新刊を三冊、アタシの新刊をさらに二冊お買い上げ。

それからもそこそこ見てくれる人はいて、わりと新刊既刊一括買いの人も多かったので、新規開拓みたいな感じにはなっていた。途中でデジたんに留守番してもらって他のところを巡ったり、逆にアタシが留守番をしてデジたんの出陣を見送ったりした。デジたんが帰ってくるまでに一時間半かかり、両手に大量の戦利品が入った手提げバッグを計四つ抱えてヨロヨロと帰ってきた。ウマ娘パワーなら難なく持てそうな重さだったけど、本人いわく「神のご尊顔を拝したら力が抜けてしまった」らしい。

「だいぶ人の流れが落ち着いてきた感じかな」

「そうですねえ。初めて創作で本を出しましたけど、幸いいつもと同じくらいのペースで捌けてくれました。いや、いつもより多い感じ？」

「どうする？　本格的にくら替えする？」

「どうしましょかねえ。創作系ならいっぱいイベがありますし、今日の続刊はそっちで出

しつつ、こっちでは今まで通りウマ娘ちゃん達を追いかけるルポを……じゅるり」

「今度こそ不審者として通報されないようにね。あとはお小遣いも使い果たさないように」

「深く反省しておりましゅ……今後は出走奨励金の積立に手をつけようとしないことを誓います……」

「学園の食堂が無かったら本当に行き倒れてそう……」

同志の後輩の行く末が気にならなくもないが、デジたんくらい戦場を選ばず走って勝っていたら、将来的にはお金の面ではあまり心配はいらないかもしれない。でも私生活面では確実に誰かの支えがいりそうな気がする。オタ活にあたってはトレーナーを同志として一緒に活動しているらしいので、デジたんとトレーナーが結婚する可能性はわりと高かった。その時は創作題材に使わせてもらおうかな。

――などと邪なことを考えていたせいか、危ない存在を引き寄せてしまったらしい。気がつくと、スペースの前にある人物が立ち止まっていた。

「どうぞお手にとってご、っ!?」
なんでトレーナーがここにいるの!?
どうしたらいいか分からなくてデジたんの方を見た。一瞬で察してくれてさりげなく机の方に寄ってくれた。アタシはそれと入れ代わりに、段ボール箱から在庫を出すふりをして顔を隠した。
「新刊一冊ずつください」
「あ、ありがとうございまひゅ！　か、かんだ……」
「ありがとうございます。不躾な感想ですみませんが……」
「はいなんでしょう!?」
「アグネスデジタルさんのコスプレがとても似合ってます！　本物みたいです！」
そこにいるデジたんはアグネスデジタルとそっくり度百パーセントの存在だから！　混じりっ気なしだから！
「あ、ありがとうございます……知人から『超そっくりなんだからちょっとやってみなよ』って言われるので、今日挑戦してみました」
「学園で見かける生徒さんそっくりだったもんで、つい声をかけてしまいました」

「アハハ……」
トレーナーが別のところに向けて歩き去っていった。災いは無事に去った。いつもお世話になっているトレーナーを災厄扱いするのは気が引けたけど、今日の新刊の内容的にアタシ本人の存在がバレると死ぬ。永久に学園の表を歩けなくなる。

そして、次の災厄はデジたんの方に来た。
「どうぞー」
目の前に来たお客さんを見た瞬間、視界の隅のデジたんの顔が真っ白になったことに気付いた。漫画で見る完全に燃え尽きた表情のアレだった。もう一度目の前の人を確かめて察した。
「わあっ、すごい！　私の現場レポがこんなにっ！」
スマートファルコンさんだった。デジたんの既刊、現地ルポの評論系の本を眺めつつ嬉しそうな声を上げていた。
「これを書いてくれた人にお礼を言いたいんだけど、今いらっしゃいますか？」
デジたんの方を見ると視線で訴えてきた。メッセージは『あたしはここにいないことに

してください！　あたしはただの売り子でひゅ！』と。
「実は書いた本人が今日外せない用事で急遽参戦できなくなって……」
「そうだったんだー……。もしよかったらその方にこれを渡してください！」
ファルコンさんからサイン入りの短い御礼の手紙を預かった。デジたんの既刊を三冊買い、とてもうきうきした感じで去る姿を見送り、横で砂になってそのまま飛んで消えそうになっているデジたんに手紙を渡した。
「我が生涯に一片の悔いなし、カフッ」
「人はいずれ死ぬ。しかし今ではない。……ね？」
「三分後に生き返りますので……」
三分後、宣言通り生き返ったデジたんとともに頒布を続けて、まわりのサークルさんが帰り始めた頃に撤収した。新刊既刊ともにほぼ完売。毎度ながら多くの人に手にとってもらえてありがたい。

ささやかな打ち上げをして無事寮に帰り着いた。同室のタイキシャトルもどこかに出掛けているらしく、部屋の電気は真っ暗だった。電気をつけて荷物を下ろした時にふとタイ

キの机の上に載っている本の表紙に目が行った。
「これ、え、どうして!?」
嘘でしょ、なんでアタシとデジたんの新刊がここに!?　机に近寄った時に背後から声がした。
「見ましたネ？」
「タイキ!?」
振り返るとタイキがいた。いつもと全然違って笑顔が全くなく、雰囲気も怖かった。なんというか、後輩の友人・グラスワンダーさんが薙刀を構えている時の雰囲気そっくりだった。
「見ラレタ以上ハ、悲しいデスがこうするしかありマセン」
「タイキ……？　ふむぐッ!?」
一瞬で間合いを詰めたタイキに正面から抱き着かれた。いや、ただ抱き着かれただけじゃない、締め上げられている。
「Good night.」
タイキの囁きの後、視界が暗転した。

○　○　○

気がつくと寮のベッドの上だった。横を向くとにこにこ、いやニヤニヤしたタイキがいた。
「よく眠れマシタカ？」
「えっ、あ、いや」
「どうしてこの二冊がここにあるカ、知りたそうな顔をしてますネ？　ドーベル、いえ、どぼ先生？」
タイキと向かい合って座り、どこまで知っているか問いただそうとした時、目の前にアタシの本が差し出された。
「先生、昔からファンでしタ！　サインくだサイ!!」
「サイン、え、昔からファン!?」

「Yes!　どぼ先生の初刊本から全部持ってマス！」
「まさかの最古参！　え、でもどうして、あれは通販とかにも出してないはず……」
「アメリカの友人からフキョウ？　されマシタ！　日本のFestivalに乗り込んで買ってきたそうデス！」
「あ、ああ……」
　まさかのつよつよバイタリティーオタクがタイキのすぐ近くにいたらしい。
「てことは、あの恥ずかしいストーリーも……？」
「どれのことかは分かりませンが、とてもハッピーなシーンばかりでしタ！」
　初期の本で描いていたいろいろなシーンは今でも恥ずかしくてあまり見たくないので引き出しの奥に封印したままにしてるけど、それも読まれちゃってると……
「たびにでますさがさないでください」
　アタシが逃げようとしたところ、強いパワーで引き止められた。
「離して！　あんなシーン描いたってバレたらもう生きてけない！」
「Huh? ハグしてキスするのはワタシのまわりではフツーですヨ？」
「タイキの普通はアタシにとってちょっと過激だって！」

もがいたけどタイキに捕まったままでは全く動けず、全てを諦めた。諦めたら冷静になって、多少はまわりを見直せるようになり、思わぬ最古参ファンの出現もちょっとは喜べるようになった。そこでふと気付いた。

「そういえばタイキはいつうちのスペースに来たの？　アタシがいない時？」

「ノー、始まってすぐに来マシタ！」

「え？　でもタイキっぽい人は」

うちに最初に来た人は、確かに背が高いウマ娘だったけど、タイキじゃなかったはず……

「グラスジキデンのヤマトナデシコ・トークスタイルでしたカラ！」

「ん？」

「ちょっとやってみマスネ？　……『新刊一冊ずつお願いします』、と『これからもずっと応援してます！』」

「あっ……」

その声は普段のタイキの喋りとは似ても似つかず、そして最初に来てくれた人と全く同

じ声だった。
「なんで正体を隠してたの？」
「普通に押し掛けタラ、ドーベルがビックリすると思いマシタ。あと、ドーベル先生のファンだってこと隠してたカラ……」
「そっか……タイキ」
「ハイ……」
「……さっきの本、サインとか全然考えたことないから今から考えなきゃだけど、いる？」
「!!　ハイ！」
飛びかかってこようとしたタイキを押しとどめ、人生初のサインを考えながら描いて渡した。
「家宝にシマス！」
「まず読んでね……あ、そうだ」
聞くべきことがひとつあった。
「ひょっとして朝から並んでたの？」

「ノンノン！　クリーク先生のサークルのお手伝いで入場シマシタ！　タイシンが別件で来れなかったそうデス」
「ああ……」
超絶絵が上手いスーパークリークさんなら来てそうだと思ったけど、まさか相方がタイキだったとは。

今度こそ一息ついてスマートフォンを手に取ったら、デジたんから一言入っていた。
『【悲報】ファル子さんに身バレしてた【出家します】』
アタシと同じような感じになってしまってて笑うしかなかったので一応返信した。
『アタシもあのスペースでタイキに身バレしてたって分かったから一緒に出家しよっか？』
『タイキさんが来てた……？　詳しく……説明してください……デジタルは今冷静さを欠こうとしています……』
『初手でうちに来てくれたウマ娘のお姉さんがいたでしょ？　あのお姉さんがタイキだった』

『ほえっ!?　でもあのお姉様、特にハウディ！　とかアメリカンスタイルな会話ではなかったような』
『グラスさんに大和撫子の流儀を習ったんだって』
『なるほどそれで』
『あそこまで化けるとは思わなかった』
『ですねえ。てことはタイキさんはあたしの本を購入されたと……オウフ』
『大丈夫。タイキはアタシの本を初めのものから全部持ってるくらいだったから、デジたんの本を買っても多分動じないと思う』
『どぼ先生の初期本から持っているとか最古参じゃないすか！　創造神がルームメイトとかタイキさん大丈夫なんでしょうか？　溶けちゃってません？』
『溶けるのはデジたんくらいだと思う』
『ソッスネ……』
『それでいつ出家する？　私も同行する』
『メジロ院』
『その返しができるくらい回復したなら出家しなくてもいいんじゃない？』

『はいぃ　とりあえずファル子さんにお礼をします……』
アタシもすぐそばにいたファン第一号にお礼をしたらまた抱き締められた、というより抱き潰された。友人の胸に埋もれて死にかけるなんて初めてだった。

数日後、トレーナー室に行った時にそれとなくイベントの話題になるよう仕向けたら、トレーナーは結構興奮気味に喋ってくれた。
「そうそう、会場でうちの生徒に超そっくりなコスプレをしてる子がいたんだ」
「ふうん」
「アグネスデジタルさんだったっけな。俺の同僚がオタ活の同志として一緒に活動してるんだが、あいつが契約してる生徒にとてもそっくりだった。いやあかわいかったな」
「……へえ」
自分でも声が低くなったのが分かった。それはさすがにトレーナーに察されたらしく、話が急に方向転換した。
「えー、あー、コホン、世の中そっくりさんというか、影武者になれそうな人っているもんだな」

「そうね」
「そうそう、そこのサークルさんにもうひとりいた子、その子もウマ娘で、顔は一瞬しか見えなかったんだけど、なんか君にそっくりな美人だった」
「そう……アタシにそっくり、ね。会ってみたいな」
「次またサークルで出てるかもしれないから、その時に行ってみたらどうだろう」
「そうね。考えとく」
まあ、そのそっくり度百パーセントのドッペルゲンガーに会うことは決してないのだけれど。
「おっ、機嫌が直ったな、よかったよかった」
「アンタ人間関係をきちんと作りたいなら発言には気を付けることね」
「同僚から一日五回言われる」
「ダートに埋められる前に直しなさいよ」
「ヘイヘイ。その時は君が掘り起こしてくれ」
「気が向いたらね」
「じゃ、次回作も期待してるよ」

「はいはい」

トレーナー室を出て歩くこと数歩。トレーナーの言葉を思い返していて、とんでもないことに気付いてしまった。

『じゃ、次回作も期待してるよ』

バ、バレ……、てた……？

慌てて舞い戻ってドアを蹴り開けた。

「トレーナー!?」

「どうした？」

「いいいいいいいいいいつ知ったの!?」

「たった今。姿を見ているうちに気付いて、そういえば描写が学園生徒でないとできないレベルの細かさだったなと思った。学園に君みたいな姿の子は二人といないから、と思ってカマをかけたら正解だったみたいだな」

誘導に引っ掛かったことを悟った。

「トレーナー」

「お礼はいらないが色紙にサインをくれると嬉しい」

ぷちっ、と頭の中で何かが切れるような音が聞こえた気がした。なるほどこれがキレる、ってやつね？

「――ハイクを詠みなさい」

「だが断る！　さらば！」

逃げ出したトレーナーを全力疾走で追いかけたものの、どうしたことかウマ娘の速さでも追いつけなかった。しかもその様子はあらゆる人に盛大に目撃されていて、かえって変な噂も立ってしまった。大失敗だった。

ちなみに、イベントの時の顛末（てんまつ）をデジたんから漫画の原案にして、そこからラブコメにつなげたいと申し出があった。その時に断れなかったのは、日頃アタシがデジたんのことを創作題材にしたいと思っていた引け目があったからであって、決してイベント話のその先でアンナコトやコンナコトを描いて欲しいからじゃない。断じて。

第五話　相思相愛相談

（With トウカイテイオー ＆ メジロマックイーン）

「……」

「……」

学園の食堂の片隅で、沈黙がすでに五分ほど続いていた。目の前にいる年下の親戚・マックイーンは、いつもの気丈さや冷酷にさえ見えてしまうほどの強い意志はどこへやら、俯(うつむ)いたままなかなか動かなかった。何かを話そうと口がモゴモゴ動いているから、気絶してしまっているわけではなさそうだった。

「……こい……」
「こい？」
プロ野球のあの球団のことではないのは確かだった。マックイーンが応援している球団はそこではない。何よりマックイーンは野球の応援によく出かけていることをアタシ他メジロのみんなには隠している。そしてみんなは隠していることを知っている。
それはさておき。この展開はアタシにとってはフィクションの世界で大変見慣れたものだ。残念ながらアタシには今のところ実体験の経歴はない。
「恋、です……」
「誰と？　……って聞く前にまずは飲み物ね。そこのお茶でいい？」
こくんと頷くマックイーンを見て、近場の給茶器でお茶を二杯用意して戻った。
「うーん、この手の話題はアタシより適任がいそうな気がしなくもないんだけどね。とはいえアタシにも思いつかない」
「ええ……誰に話そうかいろいろ迷っていたら、もうドーベルしか思い浮かばなくて……」
弱々しい声は今にも泣きそうに聞こえた。

「責任重大ね……」

「まず……ですが、やはり、ウマ娘どうしの恋愛とは、変なのでしょうか……？」

「あー、なるほど……」

想定していた中では三番目くらいに難しい質問だった。ちなみに二番目は相手がマックイーンのトレーナー（男）だった場合、一番目は学園外の一般人（ヒト男女問わず）の場合だった。

「そうね、この現代では一般に気にされるようなことでもなくなっているのは確かね。うちみたいに古くからの『家』がどうか、だと、ヒトだけの家系の家も、ウマ娘を含む家系の家もちょっと面倒なところはある。とはいえ、そのあたりのことはだいぶラモーヌさんやアルダンさんがいろいろ力を尽くしてくれているから、アタシ達は特段何の縛りもなく自由、ってとこ」

「そうですか……」

そして再びの沈黙、それは三分ほど経ってまだ続いた。マックイーンが口を開くのを待つか、アタシから話をつないだ方がいいのか。

少し考え、決めた。
「お相手は大きい方の子？　それとも小さい方の子？」
アタシの中で想定していた相手は二人、たぶんこのどちらかで正解。普段から一緒にいて絡んでいるマックイーンの知り合いはこの二人くらいだった。
「小さい方、ですわ」
「……わかった」
トウカイテイオー。マックイーンにとってはライバルのひとりでもあった。アタシの印象では猪突猛進にも見える元気のかたまり、マックイーンと比べると下手したら小学生に見えてしまうくらい活発な子だった。最近はチーム練習やレースの時以外でも一緒に出かけている光景を何度となく見かけた記憶があるけど、なるほど、やっぱりね。
「何から聞いたものか迷うところだけど、まずは、彼女のどんなところが好きになったの？」
「そう、ですわね……。どこまでもキラキラしていて、走る天才で、それでも自分の能力を過信せずにひたむきに努力する姿、でしょうか……」
「思ったよりも具体的に出てきたね。でも相手のことをちゃんと見ていることは伝わって

きたかな」

「え、あ……はい……」

マックイーンが顔を真っ赤にしてまた俯いてしまった。

「とはいえ、それだけだとまだ友情でとどまりそうな気もするし、恋愛感情までさらに一歩踏み込んだきっかけとかは？」

「はい、その……先週、少々街でいろいろありまして、その時に――」

テイオーとマックイーンがショッピングモールに遊びに行った時、テイオーが少し離れている隙に、熱心な同年代の女性ファンというか、結構行き過ぎた感のある人にしつこく話をされて困っていたところ、テイオーが颯爽と現れて助けてくれて、手を引かれて駆けて行く時、そしてその後の『ごめんね一人にしちゃって。でももう安心だよっ』って笑いかけてくれたので完全に堕ちたとのことだった。

「ああ、とても眩しい……」

「ドーベル、どうしましたの？　突然遠い目をして」

「いや、実に青春だなって」

「そうでしょうか……」

マックイーンは相変わらず顔を赤くしたまま、さっきの話でテイオーのことを思い出したのか、こそばゆくなるような微笑みを浮かべていた。
「よし、付き合っちゃえ！」
「え、あ、ちょ、」
分かっててフルスイングの返答をしたけど、予想通り固まってしまった。ごめん。
「その、告白とか、の前に、実は今日午後はテイオーと一緒に練習の予定で、先週のその出来事以来で初めて会うのですが……どう会話をしたらいいかわからなくなってしまいまして……」
「なるほどね……」
正直、アタシから言えることもできることもありきたりなものしかない。でもそれでいいか。マックイーンは別に奇抜なことをしたいわけじゃないんだから。ふと思い立って、手元のお財布からちょっとした物を取り出した。
「これあげる」
「これは……、ねこ、ですか？」
「うん。小さな招き猫のお守り。縁結びにも効く」

「でもこれはドーベルの……」
「いいの。また買えばいいし。あ、そうだ。お守りって人からもらったものの方がよく効くって話をどこかで聞いたような気がするんだけど、今度アタシに同じようなのをくれたら嬉しい」
「そう、ですね……ありがとうございます」
とりあえずがんばれ、とマックイーンを送り出した。
今までの学園内での様子を見るに、マックイーンが今告白したとしても問題なく成功すると思う。あとは踏み出す一歩かな。

○　○　○

翌日、マックイーンから何か進展が聞けるか期待しつつ食堂で昼食を摂っていたら、その前に別の子がやってきた。

「あの、ドーベル、先輩……？」
「……どうしたの、トウカイテイオーさん」
「その、ちょっと相談が……」
ひとまずお茶を取ってきて、テイオーの前に差し出した。いつも学園で見る元気いっぱいな光景はどこへやら、なんだかとても元気がないというか、心ここにあらずといった感じだった。
「こうやって話すのは初めてね。いつもマックイーンがお世話になってます」
「あ、いえ、ボクの方がいっぱいお世話になってます……」
「なんだか、いつも見かけたり、マックイーンから聞いている貴方の印象と違って、今日はなんだか元気がないみたいね。魂が抜けかけてる感じ」
「やっぱりそう見えちゃう、……見えちゃうんですね」
「無理に敬語にしないでいいよ。なんかカクカクしちゃってるし」
「なら、お言葉に甘えて……」
と返事はあったものの、次の言葉が聞けるまで数分待つことになった。

「ボク、マックイーンを泣かせちゃったんだ……」
「泣かせた？」
「うん……なんかいろいろいつも通り話してたつもりだったんだけど、途中から急に黙ったりしちゃって、どうしたのかな、ってマックイーンの方を見たらぽろぽろ涙をこぼして、声を掛けようとした瞬間に全力で逃げられちゃった」
「そっか……」
マックイーンは頑張った、ってことでいいのかな。残念ながら最後まで行かずにギブアップしちゃったみたいだけど。
「マックイーンに話を聞きたくて、もしボクが何かしちゃってたら謝ろうって、メッセージをずっと送ってるんだけど、全然読んでもらえてなくて……」
テイオーが見せてくれたスマートフォンの画面には、ひたすらテイオーの方からだけ送られるメッセージがいくつも見えた。テイオーの言う通り、既読のマークは全くついていない。
「……もう嫌われちゃったのかな……こんなことになるならすぐに好きって言っときゃよかった……」

「なるほど。聞くまでもないことだとは思うけど、その『好き』は『ラブ』の方でいいのよね？」
「ラブッ!?　う、あ、そうで……そうだよ」
テイオーの方は好意がわりとまっすぐ表れていた。もうこれで安心してお互いを対面させてくっつけられるところだけど、もう少しだけ聞いておきたいことがあった。
「マックイーンのどんなところを好きになったの？」
「ひとつの目標に向かってひたすら努力するかっこよさ、時々スイーツの誘惑に負けて体重が増えちゃうけど頑張って整え直す強さ、あとね、ボク、マックイーンに助けられたんだ」
「それってどんなことがあったの？」
「ボク、今まで何回か骨折してたんだ。一回は菊花賞の前、その後も治って、折れて、脚と一緒に心も折れかけてた」
テイオーはどこか遠い目をしていた。だいぶ前のことといえばそうだけど、やはり重要なレースを目前にして怪我をしたとなれば、後悔はいつまでも残るに違いない。その心情は自分が現在進行形で味わっているところでもある。

「マックイーンは別に慰めはしなかった。ただ、ボクの目の前でいつも通りにトレーニングを続けて、その合間にボクとお喋りしてくれた。それだけだったけど、それが一番嬉しかったんだ」

「なるほど」

「これといったきっかけははっきり思い出せないんだけどさ、マックイーンがちょっとふらついて脚を軽く痛めた時だったかな、ボクが背負って保健室まで連れていったんだけど、耳元でお礼を囁かれた時に急にマックイーンの存在が迫ってきたような感じがしたんだ。こう……柔らかさとか、温かさとか、髪の匂いとか……、ごめん、忘れて。なんかボクがヘンタイみたいだ」

「まあ、とてもわかるけど……」

「それでさ、マックイーンと一緒にいてお喋りするのがもっと楽しくなった。出会うたびにどきどきしてこのまま気を失っちゃうんじゃないかって思ったことも何回もあったけど、練習の時、おでかけの時、いろんな時が今までよりもっと楽しかった」

　でもね、とテイオーの声が一段低くなり、力もなくなり、目がどんよりとした雰囲気になった。

「先週、いっぱい喋ってたんだけど、最初に話した通りになっちゃってさ……もうどうしたらいいのかわかんないよ……」

弱々しくつぶやいて、しかも目から涙をこぼし始めたので、あわててハンカチを貸した。

「まあ、貴方とマックイーンがどんな話をしていたかは分からないけど、別にマックイーンは怒ったわけでも傷ついたわけでもないのは確かね」

「そうなの……？」

「ええ。実は昨日マックイーンからちょっと相談を受けててね。貴方のことだったんだけど」

「えっ!?　何の相談だったの!?」

「詳しくはマックイーンから聞いた方がいいけれど、少なくとも貴方にとっては悪い話じゃないと思う」

「そうなんだ……」

「でもマックイーンがつかまらないんでしょ？　アタシとしても答えが決まってるのにも

どかしい光景を見せられるのは非常にもやもやするから。ちょっとこっちに」
テイオーに作戦を耳打ちした。あからさまに尻尾がピンッ、と張って、さらに顔を真っ赤にして挙動不審になったけど、こうした方が二人が迅速に幸せになると、ここまでのテイオーの話しぶりで分かった。
テイオーがギクシャクした動きでアタシのもとを離れたところで、マックイーンに連絡した、メッセージを入れてさらに畳みかけるように電話もした。
『……もしもし……ドーベル……？』
「すぐに食堂に来て。異議は認めない」
返事を聞かずに切った。

それから十分ほどでマックイーンがやってきた。何で呼ばれたのか薄々感付いているみたいで、とてもそわそわしていた。
「それで、どのような……」
「――目元。ずいぶん泣いたみたいね」
「これは……はい」

「昨日の今日でそんなに泣くようなことになった理由、聞いてもいい？」
「はい……」
結論から言うと、想いを伝えようとして全く切り出せないまま話が進んで、心がぐちゃぐちゃになって涙が出てきてそのまま逃げてしまったということだった。
「それで、逃げた後にテイオーから何か連絡は来てたの？」
「はい……通知とそこに出る文章の一部だけは見ましたが、アプリを開いてきちんと見る勇気がなくて……」
「開いた方がいいと思うな」
メッセージを読もうとして、でも手を震わせてなかなか操作できないでいたので、横から手を添えた。ようやく開けたところでマックイーンが固まり、それから肩を震わせ始めた。
「何て連絡が来てた？」
「泣かせてごめん、……話がしたい、っ、！　待ってる、って」
「行く？」
「行きたい……いえ、行かねばならないのは分かっているのですが、とてつもなく怖いの

です……想いを伝えたら拒絶されるのではないか、と。今までにずっと深まっていた関係性が一気に全部崩れてしまうのではないかとっ、」

「まあ、そのように恐怖を覚える気持ちは少しは理解できる」

「……このまま、この気持ちを無かったことにして、ずっと友人としていた方がいいのではとさえ思っています。すべてを失うくらいなら、たとえ想いが絶対に果たされないとしても、ずっと一緒にいられた方がいいと」

「それが本当の願い？　それで本当にいいの？」

「いいわけ……ありません……」

「テイオーのことは好き？」

「ええ……とても、好きです。それだけは変わりません」

「そ。なら良かった」

マックイーンの返事を聞いたところで、すぐに後ろの物陰に向けて声を投げ掛けた。

「じゃあ、次はテイオーの番ね」

アタシが声を掛けると、テイオーがおずおずと出てきてこちらに歩み寄った。

「テイオー……」
「マックイーン……」
マックイーンが立ち上がりかけたところで、テイオーがさらに距離を詰め、マックイーンに抱きついた。
「ボクね、昨日から今日までたった一日なんだけどさ、マックイーンのことばっか考えて返事を待ってた。実はさっきまでドーベル先輩に話を聞いてもらってた」
「実は私も……ごめんなさい。突然泣いて逃げてしまって、メッセージも全部無視してしまって……でも、ずっとテイオーのことを考えていましたわ」
「そうだったんだ……えへへ」
抱き合ったまま二人とも静かになり、しばらくしてぽつりとテイオーが話し始めた。
「マックイーンって、温かくて、もちもちしてて、いい匂いがする」
「もちもち……やはり太って……、いえその前に！　その……テイオーはひょっとして、その……」
「ヘンタイ不審者みたいなこと言ってるっていうんでしょ？　でもそうかも」
「そこは否定すべきところでは……」

「嘘ついたってしょうがないもんね。マックイーンを今すぐにでも食べちゃいたいくらいだし。いろんな意味で。にしし」

マックイーンが固まり、湯気がでそうなくらい真っ赤になって俯いた。たぶんいろいろ想像しちゃったんじゃないかと思うけど、そろそろ二人の名誉（？）のためにも動かなければ。

「えー、マックイーンとテイオー。取り込み中のところ悪いけど、続きは別のところでした方がいいわよ」

「はい？　……あ、え、うそ」

「人がいっぱい……」

近場にいた生徒が十数人集まってきていた。そして最前列では幸せな顔をして永遠の眠りにつきかけているデジタルがいた。

「ようお二人さん、結婚披露宴の会場はあっちに用意したぜ？」

どこからともなく出現していたゴールドシップ先輩がニヤニヤしながら親指で外を指差した。目が笑っていなかったのが気になるけど。

マックイーンに加えてテイオーも顔を赤くして固まってしまったため、二人の背中を無

理やり押すようにして食堂を出て、外のベンチのところまで連れて行った。
仲良く並んで、身体を小さくして固まって座っている二人を見て、両方の背中をポン、と叩いてアタシは帰ることにした。二人ともお幸せに。

○　○　○

ちょっとだけ、二人が羨ましかった。アタシにも気になる人がいる。関係も悪くないはず、たぶん。でもその関係が壊れるのがとても怖くて、まだ何も言い出せていない。それどころか逆につっけんどんな対応をしてしまって自己嫌悪になってばかり。
さっきマックイーンが言っていた弱音は、そのまま自分にもあてはまっていた。だからこそあの招き猫のお守りも持っていたのだけど。

神様、どうかアタシにあと少しだけ、勇気をください。

第六話　お姉ちゃんへのプレゼント

（With メジロドーベルの妹・弟、トレーナー）

日曜日の昼下がり、今日はトレーナー業務が早く終わった。今日これからと明日月曜日が丸一日休暇なので、何をしようかと考える。

ちょっと前に同僚トレーナー何人かと今日の予定について話をした時、俺が『その日の明けは東京レース場にメインレース観に行くわ。現地では若い子達の才能と実践から良いトレーニング手法を学ぶ』と返事したら、五人中三人にワーカーホリックだと恐れられた。あと二人は同志だった。その二人は担当の子とともに阪神レース場に観戦に出向いて

いた。うちのチームのメンバーは揃って謎の短期合宿（ゴールドシップ主催）に出ていた。トレーナーの俺がいなくていいのかと尋ねたら、ただの物見遊山だからいい、約七百歳のアタシに任せろと言われたので引き下がった。

学園の門を出た時、斜め前の方に小さい子――おそらく姉弟――と、二人の母親……にしては年が若そうだな、お手伝いさんかもしれない人が視界に入った。その三人のうち、子ども二人が俺を見つけるなり駆け寄ってきた。女の子の方はウマ娘のようだった。

「あのっ！」

「ん？　どうした？」

最初に声を掛けてきた女の子に続き、今度は男の子の方が俺に尋ねてきた。

「お姉ちゃんの、ドーベル姉ちゃんがいるチームのトレーナーだよね？」

「？　ああ、そうだが。君たちは？」

「お姉ちゃ、メジロドーベルの妹と弟ですっ。ちょっと頼みたいことが……」

本人ではなく、チームトレーナーの俺を探して直接会いに来るからには、何か特別な事情があるんだろう。まだ小学校低学年くらいの幼い姉弟をこのまま帰らせるのも気が引け

るし、何より俺は暇だ。
「わかった。学園食堂のカフェテリアで話をしよう」
二人の後から来た大人のヒトの女性――やはりお手伝いさんだったらしい――とも挨拶をして、三人を案内することにした。

門のすぐ横の守衛室で三人の入構手続をした後、カフェテリアに連れて来た。まだご飯を食べていないらしく、ご両親には何と言って出て来たかを聞いたら、
『学園でお姉ちゃんのトレーナーさんに会ってくる。ハルお姉ちゃんに連れてってもらう。ご飯はいらない』
とのことだった。好きなご飯を選んでもらいつつ、姉の方に教えてもらった電話番号に電話をかけて、家の方に連絡した。
二人の、すなわちドーベルの母親は大変恐縮していた。聞くところによると、ドーベルに何か贈り物をしたいというメッセージのやり取りの流れで、俺のところに聞きに行くことになったらしい。よろしく頼まれたので、改めて引き受けることにした。
席に四人揃ったところで、改めてお互いの自己紹介をした。ドーベルの妹（ウマ娘）に

して姉弟の姉、それと弟（ヒト）、そして二人の引率役をしているお手伝いさんのハルさん（ヒト・女性・大学生）、俺。傍から見たらワケがわからん組み合わせだ。まずはご飯を食べることにして、それからいろいろと話を聞くことにした。

「おいしかったー！　これみんなタダなんですか!?」

「ああ。ＵＲＡの奢りだ。ライブイベント収益やトゥインクル・シリーズを走るウマ娘のグッズ収益を還元しているというやつらしい。誰でも使える」

「へー、私もここで仕事しようかな？」

「ハルお姉ちゃんうちやめちゃうの？」

「ハルさんやめちゃうんですか？」

「うっ……やめないやめない、だから安心しな！」

ハルさんはとても元気なヒトで、この姉弟から懐かれているらしかった。

「それで、頼みたいことって何だ？　ここに来たってことは、ドーベルと関係がありそうだが」

「はい。お姉ちゃんにプレゼントをしようかと思って……」

姉の方がおずおずと話し始めた。

「その、別に大したことじゃないんです。この前の誕生日みたいな大きなイベントの時のプレゼントみたいなものじゃなくて、普段からのお礼っていうか、ちょっとした応援というか。でも、何したらいいかわからなくて、あと、お金もないし……」

「なるほどなあ」

「あたしは『どんなものでもベルさんは喜んでくれるっしょ！』って言ったんですけどねー」

「まあ、確かにそれは俺も思うが……それでも誰かに聞いてみたいと思ったならば、多少なりとも役に立つ返事をしたいところだな」

「おお、これがトレーナーかー。学校の先生みたいだ」

ハルさんが楽しそうに言うので笑って返した。

「先生みたいな存在だしな」

「プレゼントを決める方法のひとつとして、もう少しお礼の『目的』、といっちゃ意味が伝わらないな、お姉さんのどんなところにより力を入れてお礼がしたいか、というのを考

えてみるのもひとつある」
「なるほどー」
なぜかハルさんの方が返事をした。俺の言葉を受けて妹と弟は少し考えていた。
「……やっぱあれだよね」
「そう思う」
答えが出たらしい。
「お姉ちゃんを応援したいです。……お姉ちゃんの恋を」
「……ッ、スゥー……」
「あれ、トレーナーさん？　魂抜けちゃってる？　トレーナーさん？？　しっかり！」

気がつくとソファ席に横になっていて、三人から覗き込まれていた。
「失礼、取り乱した」
「いやーびっくりしました。オロオロしてたら緑色の制服を着た方が通りかかってくれて、何か気合を注入してくれました」
「ありがとうたづなさん。うっかりチームを残して冥界に逝ってしまうところだった」

「あれだけでそこまで行っちゃいます？」
「三十代恋愛未勝利どころか未経験のオッサントレーナーたるもの、思春期のウマ娘諸君がたくさんいる空間への耐性はあるが、時々こうして敗れることがあるんだ」
「はあ……」
ハルさんに呆れられた顔で見られた。
「いや、まあ、ドーベルのその件らしきことについては、断片的に把握している。というかつい目撃してしまった。邪魔しちゃ悪いと思ってすぐに引き返して遠くに行ったから、細かいことはあまりわからない」
先日、トレーナー室で向かい合っていたゴールドシップとドーベルのことを思い浮かべた。
「お姉ちゃんと付き合っている人見たの!?」
弟の方がすごい勢いで身を乗り出してきた。
「ああ」
「どういう人でした……？」
「あー……まあ、相手はうちの学園の子だよ。ウマ娘さ。相手は……これはお姉さんが直

接話してくれる時に聞いた方がいい。俺から勝手に話すと、ドーベルじゃなくてその相手からシメられてダートに埋められかねない」
「お姉ちゃんの相手って怖い人なんですか？」
いつものオーバーな表現で喋ったら姉弟が怖がりだしたので慌てて訂正した。
「おっと間違えた。強いデコピンの刑が待っている」
「そうですか……」
「ちなみにそれって片想いとか両想いとかってわかります？」
ハルさんの質問には首を振るしかなかった。
「わからん。その相手も何となくドーベルのことを気にしているような感じはあったようには思ったが。いや、むしろまずそっちの方が先にあったか……？」
考え過ぎて頭が痛くなったので、ここでひとまず休憩にした。いい感じのスイーツを選んで取ってきて一息ついた。
「やっぱりあれですかね、どストレートにお守りでも作りますか？　恋愛に効く色とか何とかを使ったものとか」

「四つ葉のクローバーのしおりとか……」
「置き物とか」
「お姉ちゃんの好きなアロマで使うもの、とか？」
「うーん……」
四人でひとまず案を出したものの、さて何にしたものか。
「どれでも喜んで使ってくれそうだが」
最終的な答えはこの姉弟に決めてもらって、それを支援しよう。

姉弟がしばらく二人で話していたが、結論がまとまったようだった。
「ちょっとしたお守りを作りたいです」
「なるほど」
「いいねー！」
お守り、いいかもしれない。身につけてもらうか、部屋に飾ってもらうかすればいい。
「どんなの作ろうか。いや、そもそもお守りってどう作ればいいんだ？」
「調べてみますねー」

ハルさんがスマートフォンで何やら調べ、すぐにあたりをつけたようだった。
「これがなんか良さげじゃない？」
「わあっ！　これいいです！」
「こんなのあるんだ……」
「このお守り作りの世界も面白いな」
恋愛成就向けのお守りとして、フウセンカズラの種を入れた小さなお守り袋を作るというものが見つかった。今の時期ならフウセンカズラの種を手に入れるのも簡単だ。
「この『トゥインクルスターシード』ってのも面白そうですね！」
「その字面、トゥインクル・シリーズをめっちゃ思い出す」
種をカラフルな天然素材でコーティングして、まず見て楽しめるというものらしい。四つ葉が出やすいというクローバーの種が見つかった。
「二人いるし、このフウセンカズラのものと、クローバーのトゥインクルスターシードのものを作ったらよさそうだ」
「そうします！」
「がんばる！」

作るものは決まったので、材料を探しに繰り出すことにした。
「種は近くの花屋さんにあるっぽいな。あとは……お守り袋？」
「縫うのはちょっと大変ですし……あ、このカラフルな小さい封筒、えーと……『ぽち袋』を使う方法があるみたいです！」
「どっちがいいかな……」
姉弟に聞いてみたところ、どちらもさすがにまだ針を使って縫ったことはなかった。ほんの少しの縫い物とはいえ、初心者相手だと少々ハードルが高い。俺も中学校の家庭科でやって以来か？
「まずはぽち袋を使って作ってみるか」
「はいっ！　がんばります！」
まずは花屋さんへ。フウセンカズラの種はすぐに手に入った。クローバーのトゥインクルスターシードはここには無かったが、わりと近くの雑貨店で取り扱っているとお店の人が教えてくれた。
「確かにこの種の写真、白いところがハートの形っぽく見えますね」

「うむ」
「コロコロした感じですね。早く開けて中を見てみたいです」
「材料を調達したらトレーナー室で作るか」
「はい！」
雑貨店でトゥインクルスターシードを見つけ、さらに良い感じのぽち袋も買うことができた。ちなみに代金は姉弟が出した。自分やハルさんがさくっと払ってもよかったけれど、姉弟が自分で出したいと言ったのと、代金自体が全部で三百円くらいで済んだので、姉弟の意志を尊重することにした。
また学園に戻り、今度はトレーナー室へ行った。
「あのー、この入口の脇にデカデカと掲げられた『自重』ってなんですか？」
「うちのチーム名だ」
「へ？」
ハルさんだけでなく、姉弟の目も点になっていた。
「最初の頃のトラブルで理事長から説教されてその二文字を頂戴してな、初めは仮の名前のつもりだったんだが、チームメンバーが『チーム名はこれでいいでしょ』って全員一致

で決めてしまったんだ」
「うーん……このチームのみなさんってエキセントリックなんですか？」
ハルさんの疑問に即答はできなかった。
「そんなことは無いと思うが……いや、うーん」
「……深くは聞かないでおきます」

はさみとのり、マジックペンを揃えてさっそく工作スタート。種のパッケージを開いてコロコロと机の上に広げ、ぽち袋に収める。フウセンカズラの種は写真の通り、白いところがハートの形っぽくなっていた。何か目と鼻を書くとサルの顔にもなりそうだと思っていると、ハルさんが調べて、そういう感じに顔を描いて遊ぶのもあると知った。
カラフルなトゥインクルスターシードは、せっかくなので全部のカラーが入るように種を選んで入れた。こちらを入れる袋は、ちゃんと種が見えるように底の方が透明になっている袋を選んだ。あとは袋をお守りっぽい形に角を折ったりしてのりで留めて、整える。
「できた！」
「こっちも！」

「いい感じだねー」
無事お守りが完成した。あとはいつ渡すかだが、
「明日ベルさんが旅先から帰ってくる時に、おうちに寄るみたいです」
とのことだった。
ハルさんと姉弟を門のところまで送ったところで、もうすっかり夕方になっていたことに気がついた。突然のイベントだったが、実に充実していた。明日、月曜日は何をするか。家でレース分析か。

火曜の放課後、トレーナー室に来たドーベルが嬉しそうだったので、答えを知りつつも聞いてみた。
「ドーベル、週末何かいいことでもあったのか？」
「はい。週末の合宿帰りに実家に寄ったんですけど、その時に妹と弟から手作りのお守りをもらったんです」
「ほう。それはよかった」
「はい。……なんだかとても勇気をもらえました」

ドーベルの淡い微笑みの表情を見て、あの破天荒かシリアスかいまいちわからん謎のウマ娘にして、うちのチームの中心ともいえるあいつとの恋が実るといいな、と外野のような関係者のような立場からふと思ったところだった。

ちなみにそのお守りは自分用のもあって、「どうせ種が余ってるんなら作りましょう！」と、ハルさんが自分の分に加えて俺の分も作ってくれた。鞄の片隅に入れてある。

第七話　Trial #0：翡翠の記憶

（With ゴールドシップ）

トゥインクル・シリーズで活躍したレジェンドウマ娘は、引退後も結構活躍している。メディアに出ていることも多い。ただ、中には今どうしているか分からないのもいる。

つい最近、長いこと行方が分からなくなっていた十数年前の菊花賞で勝ったウマ娘がようやく見つかったというニュースが流れた。それまでは家の事情で隠れ住んでいて、まわりの人達もそれを守っていたとかいうドラマみたいな話だった。世界って何でもバレるようでいて、分かんねーことも一杯あるもんなんだな。

アタシはレースから完全引退して北海道に移住した。住むとこはダーツで決めて、良さげな家を探して見つけた。最初の頃こそマスコミの取材が家に直接ひっきりなしに来たけれど、今はＵＲＡが仕切ってくれてるっぽいから楽なもんだ。

ひとまず今は月に二、三回くらいレース場に解説とか何とかで出て、あとは近所のガキんちょ達の面倒を見る仕事をしてる。放課後ナントカクラブとかなんとか。このへんの小学校にだいたいひとつくっついた感じで建てられてて、三時くらいに学校が終わった小学生が、夜の六時に親が帰ってくるか迎えに来るかくらいの時間までいて、遊んだり、ゴロゴロしたり、マジメなやつは宿題をやったりしてて、アタシはその横でパズル解いたり。

こういったクラブはまわりの小学校の横にもあって、それぞれボランティアだったり正規のスタッフがいたりして、時々交流する。その中のひとり、隣の隣くらいの小学校のクラブに、ちょっと気になるおば……、いけね、こんな言葉使ったらボスにボコられる。コホン、ちょっと年上の姉ちゃんがいた。ウマ娘なんだけど、普段はヒト名っぽいのを使ってて、みんなからは「リンさん」と呼ばれている。ウマ名を前なんとなく聞いた時もはぐらかされたし、まわりの人らも「リンさん」という名前しか知らねえんだと。ま、世の中

結構ヒト名だけ使って暮らしてるウマ娘は多いもんだけど、でもあの姉ちゃん、なんかオーラが違うんだよな。こう、覇者って感じ？

それで、今日はその姉ちゃんがいる放課後クラブんとこにお使い。来週の定例会のためのいろんな物を届けろとボスの婆様からのお達しだった。めんどくせーと文句を言ったら筋肉をバスターされた。ヒトの婆様なのになんでウマ娘よりつえーんだ？

家から軽トラ持ってくんのも面倒だったから、クラブの横に転がしてあったリヤカーに全部積んで牽いて持ってきた。結構重いんだが、ばんえい神事やレースに出るような適性のウマ娘だと、アタシより小さい身体でこの十倍積んだ車を引っ張ることもできるらしい。

「ちわーっす」

「あら。ずいぶん早かったね」

声をかけると、出てきたのはまさにその姉ちゃんだった。クールな感じだけど、笑顔を見るとそのかわいさにとてもドキっとする。

「早く持ってけって婆さ……、ボスがうるさくて」
「タカハシさんは仕事をいち早く片付けたがる方だからね。そのおかげでとても助かるんだけど」
「どこに積み上げといたらいいっすか？」
「そうね……、あの隅にあたりにいいかしら。二人でやればすぐ終わりそう」
「いや、アタシだけで大丈夫っすよ」
「本当にいい？　こう見えてちょっとは力あるし。ウマ娘だから。もう娘って歳でもないけど」
結局アタシとその姉ちゃんで一緒になって運んだ。確かに姉ちゃんは楽々ものを運んでた。
「ありがとう。これで来週ここで合同イベントが開ける。あなたもボランティアで来るんだっけ？」
「っす。走り回る連中、特にウマ娘をとっ捕まえろって」
「確かに適任そうね。ステイヤー寄りだし。今は長距離走ったりするの？」
「全然っす。肉離れしそうで」

脳裏に苦い記憶が蘇った。あの日急になんか調子が変になって、無理やり走ったけど当然負けて、あまりにも痛くなってラチに寄りかかったところを搬送された。結局肉離れを起こしてたっぽくて、走るのに失敗してたら今頃杖ついてたかもしれん。

「リンさんはどうなんすか」

「私も無理かな。ちょっと走ってたことはあったけど、今は全然」

にこやかに言う姿に、やっぱり時々感じるオーラは気のせいだったのかもなと思った。でも一応聞いてみたくなった。

「どこで走ってたんすか？　なんか大きな大会とかっすか？」

「うーん……ナイショ」

やっぱり教えてくれなかった。

翌週、イベントの日。いつも相手をしている小学生のガキんちょ達以外に、幼稚園や保育園のちみっこ達が大集合していた。陣営としてはウマ娘三分の一、ヒト男女がそれぞれ三分の一ずつ。実にバランスがいい。しかしまあ全員があっち駆け回り、こっち駆け回り

していて、とりわけすばしっこく遠くまで走って行きがちなウマ娘の面倒を見るのにアタシやリンさんが駆り出されていた。

「おーいお前ら走るなら前後上下左右過去現在未来全部見ろー」

「見るとこ多過ぎだろゴルシー！」

「見ることができないなら走んなー、誰かにぶつかったら骨バッキボキコースだぞ」

「はーい」

注意してゆっくり動くようになるのももって五分。これはもう仕方ねえ。一息入れて全体を見渡すと、視界の端にトコトコどこかへ小走りで行こうとしてるヒトの女の子が映った。何かを追いかけているのか。

「！　あいつッ！」

何も見ずに道路に出ようとしていて、しかもアタシの耳に車の音が聴こえてきていた。門のところは見通しが悪い。まずい。ここから走って間に合うか？　やるしかねえ！

「おい門のところのお前こっちに来い！」

アタシの叫び声に女の子は立ち止まってこっちを見た。が、よりにもよって道路のど真ん中だった。救い上げて向こうの草地にスライディングするまでギリギリか。車相手に骨

の一本や二本くらいはくれてやってもいいが、女の子にケガをさせないようにするには。
車が見えた。まずい。もう間に合わない。

その時、アタシの横を高速で誰かが駆け抜け、女の子を救い上げつつ安定したフォームで向こうの草地に駆け込んだ。車の方も急ブレーキが間に合ったのか、さっきまで女の子がいた場所の直前で止まっていた。アタシは女の子と、女の子を救ったウマ娘――リンさんのもとに行った。というか勢いのあまり本当にスライディングしてたどり着いていた。
「いってえ……大丈夫か？」
「あなたよりは」
目を丸くした女の子と、苦笑するリンさんに迎えられた。騒ぎに気付いた他のスタッフ達が駆けつけてきたので一通り話した後、いろいろ任せて会場に戻り、引き続き仕事をこなした。
夕方、無事イベントが済んで後片付けも終わったところで、リンさんに声を掛けた。
「お疲れ様っす」
「お疲れ様。はい麦茶」

渡されたペットボトルの麦茶を半分ほど一気に飲み、隣に座った。
「昼過ぎのアレ、速かったっすね」
「人の命が懸かってたからね」
「――あの速さ。普段走ってないのにあれくらい出せるなら、現役時代はＧＩ級で普通に勝てたんじゃないっすか」
「何の話？」
「古い写真やトゥインクル・シリーズのレース動画、いろいろ観ました。今のリンさんはある色のものを全くつけていなかったので苦労したっす。でも……最後は名前、いえ、『偽名』、あるいは『ニックネーム』が決め手になりました」
リンさん――を名乗るＧＩウマ娘にその名前を告げた。
「メジロドーベル……さん」
「ばれちゃったか」
リンさんは両手を上げて降参のポーズを取り、ちろりと舌を出してにこやかに笑い返

した。

「ここ四、五年だと、私の正体を見破ったのはあなただけだね。まあ、髪の長さをミディアムにしたら自分でも別人かなって思っちゃって、マックイーン――親戚も一瞬私だと見抜けなかったりしたな。細かいところだけど、自分のことを『アタシ』と呼んでたのを『私』にしただけでも結構効果があったり？　あと、メジロのカラーのアクセサリーとかをつけていなかったらみんな気付かない。あなたも特定に苦労したくらいだし」

メジロ家のウマ娘が勝負服やアクセサリーに取り入れている緑色、言葉でうまく表現するのは苦しいけれど、あえて言うなら翡翠（ひすい）の色のひとつに近い感じか。

「そんなもんなんすか。あれだけ一杯勝ってててもこうして街に溶けこめちゃうって」

「引退後の初手で『ちょっとゆっくりします』って言って、すぐにイメチェンとかしてここに移住して来たからわりとあっさり行けたよ。いろいろ資格取るための学校でもなんとかなったし」

名門メジロ家、しかもＧＩ級のレースで五勝していた人ともあれば、あっという間にマ

スコミや野次馬が引越し先に集まりそうだと思ったらそうでもなかったらしい。メジロのその色があるとすぐにメジロ家だと分かるし、逆にその色が無いと、リンさんが言ったみたいに気付けないかもしれない。雰囲気が変わっていたら特に。

「あなたみたいにＧＩを六勝してて、わりとよくメディアに出演してもヘンな取材とか来ないでしょ？　ＵＲＡってなんだかんだできっちり統制してくれてるみたい。あとはファンのみんなも騒いだりしないでくれてるし」

「へえー……で、リ、ドーベルさんの正体を知ってる人はこのあたりのクラブには」

「リンの方がいい。偽名っぽく使ってて定着しちゃってるし。まわりにびっくりされちゃいそうだから。……そうね、このあたりで正体を知っているのは、あなたのところの所長のお婆さまくらいかな。そして今日あなたが加わった感じ」

「そうなんすね……」

「ここまで来るともうまわりに正体バラしても問題ない気もするし、案外みんな知ってそうだけど、一応ナイショね？」

イタズラっぽい笑顔でシーッとするように指を当て、ウインクされたのでまたドキッとした。

「よく考えたら、偽名のリンさんって結構安直っすよね。ドーベルからベルを取り出して、さらにそれっぽい単語にした感じで」
「安直なのが意外とバレないよ。最初はもっと安直に『ベル』にしようかと思って、でもさすがに安直すぎるかと思って『スズ』にしかけたけど、これだとスズカとかぶっちゃうなって思ってもう少しだけひねった」
「なるほど……アタシも何かいいニックネームつけよっかな。パーソナリティーとしてのコードネーム？」
「ゴールドシップだから……ふね……ふねこ？」
「どこかのゆるキャラっぽい名前！」
名前かぶりはいけねー。別の名前にしないと。すぐには思いつかないので後でおいおい考えることにした。

「今日はありがとう。所長さんによろしく言っといてね」
「うぃーっす」
「じゃ、また今度ね」

「どもー」

帰り道、うちのクラブから持ってきていた道具をリヤカーに乗せて帰りつつ考えた。意外と有名なウマ娘が街の中に溶け込んでいたりするのかもしれないな。この前見つかった菊花賞ウマ娘も、リンさん――メジロドーベルさんも、輝かしい戦績でマスコミとかの取材もいっぱい受けててみんな知ってそうだけど、それでもバレないもんなんだな。

ただ、それはちょっと怖いなってアタシは思った。アタシはどちらかといえば「アタシはここだぞ！」ってやりたい方だから、できればもっと歳食っても「あっ、ヘンなウマのばーちゃん！」ってガキんちょに声をかけられるくらいでいたい。ま、そのためにはいろいろやんなきゃな。なんとかチューブみたいな名前でチャンネル開いたりとか。

「ただいまー」

「遅かったねゴルシ。リンちゃんとでも話してたのかい？」

「おう。二人きりの時にリンさんの秘密を解明したぞ」

「女の子レスキューの話は聞いた。ゴルシも良くやったが、ＧＩ五冠の中距離選手は格が違っただろ？」

「だな。こんな近くにレジェンドがいるなんてな」

「すぐそこに他にもすごいヤツがいるかもしれないねえ。カカッ！」
一息ついて、ふと婆さんに尋ねてみたくなった。
「なあ婆さん」
「なんだい？」
「リンさんって普段全く走ってねえの？　なんかもの凄く速かったしさ」
「いんや。リンちゃんは毎日ジョギングして、月一くらいメジロの別荘のフィールドで実戦さながらの走りをしてるよ。でなきゃ咄嗟にあんな速度で走れんさ」
「だよな」
「アンタもレース場に仕事に行ってんだからたまには走りな。筋肉が落ちたんじゃないかい？　リンちゃんに併走頼んどくかね」
「うるせーアタシ一人でやってやらあ」
ウマ娘専門医を長く続けてきた婆さんにはお見通しらしい。ひとまずは一人でやるとして、二、三か月したらレジェンド様と走ってみたいもんだ。
そして、ふと思った。もしアタシとリンさんが同い年、あるいは同時期にトレセン学園

にいるような関係性だったとしたら、仲良くなれただろうか。距離適性が違っているから交流は無かったかもしれない。でも、今日みたいに何かのきっかけで仲良くなれることもあったかも、なんて。

……いきなり何どうでもいいこと考えてんだろなアタシ。まるでリンさんに恋でもしちまったみてーじゃねーか。

……あー、いや、これはこれは。

「年上の姉ちゃんに恋、なあ……」

リンさんの正体を探るためにたくさん見た、映像や写真に数多く映った翡翠の色が、いつまでも脳裏から離れなかった。

あとがき

お久しぶりです。麦（穀物P）です。

この短編集は、『ウマ娘 プリティーダービー』同人イベント・メジロ家オンリーイベント「Historie's Mejiro Stakes（メジステ）」のために執筆した短編七本を収録したものです。メジロドーベルさんをメインに、さまざまなウマ娘とのかかわりを書いたものとなっています。カップリングの相手は史実（モチーフ元のお馬さん）でも関係がある相手が半分、ウマ娘世界で関係があったり、二次創作の世界でカップリングが成立している相手が半分、全く接点がない相手が一名となっています。ご笑覧いただければ幸いです。

以下、自分語りの蛇足です。

私は何回か同人イベントに出ていて、小説系の方でもコミックマーケットやこみっく★トレジャー、COMIC CITYに出展したことがあります。ただ、今まで出てきたのはオールジャンル型のイベントで、キャラクターやジャンルを絞ったオンリーイベントは今回が初参加でした。イベントの存在をX(Twitter)で知り、リポスト（リツイート）して考えていたところを主催アカウントの方からお声掛けいただいて、締切前日に参加を決めて申し込んだ次第です。

どちらかというとあらゆるウマ娘の箱推しに近い感じのハマり方ですが、その中で少し強めに関心を寄せているのがメジロ家のみなさんです。その理由は、マックイーンさんが主人公の一人となっていたアニメ第二期を観たこと、そのマックイーンさんが前々から気に入っていたゴルシの母父（お爺さん）にあたるとのことで一層注目したこと、そして、私がX(Twitter)でフォローしている方にメジロドーベルさんの熱烈なファン（ウマ娘、モチーフ元のお馬さんとも）がいらっしゃり、タイムラインを介して感化されたことにあります。

そうした経緯のもと、ウマ娘の二次創作小説を本格的に書き始めた時に、ゴルシとメ

ジロドーベルさんを主人公として長編『Trial #143 ――空位の騎士――』を書きました。ゴールドシップさん（お馬さん）とメジロドーベルさん（お馬さん）は、今この同じ時代を生きていますが、活躍した時期が十年単位でずれていて、また、レースを引退して繁殖入りした後も特に接点がなく、ウマ娘の世界でも特段の交流があるようには描かれていません。それゆえ、このカップリングは自分の趣味丸だしの完全創作カップリングです。ゴルシとマックイーンであれば史実通りの『じじまご』カップリングだったり、作中での同じチームつながりで多数描かれていますが……。

　それから単発では様々なウマ娘のＳＳを書いていますが、描写に史実を入れたくて戦績を見ていると、ウマ娘になったお馬さんの子（産駒）や孫も一緒に多く走っていたりしてすごいなと思います。メジロドーベルさんの子孫からもさらに活躍するお馬さんが出てきてほしいなと思います。ドーベルさんも今年三十歳となるなど大変長生きでいらっしゃるので、見学できるイベントがまたあれば、遠くからでも拝みに行きたいところです。

麦（穀物Ｐ）

翡翠の記憶

著者　：麦（穀物P）
発行元　：麦之穂
サイト　：https://mugimoho.ehoh.net/
連絡先　：circle_mugimoho@aotake91.net
発行日　：二〇二四年（令和六年）六月三十日
印刷所　：ちょ古っ都製本工房（https://www.chokotto.jp/）
初回頒布：二〇二四年（令和六年）六月三十日
「Historie's Mejiro Stakes」（メジステ）